

銀座第1遺跡
(五次調査)
Ginza 1 site

東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 64

2011

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第194集

『銀座第1遺跡（五次調査）』 正誤表

ページ・図番号	誤	正
p. 21 左29行目	<u>21</u> はチャート製の	<u>22</u> はチャート製の
p. 21 左30行目	<u>22</u> も凹基盤であるが	<u>21</u> も凹基盤であるが
p. 26 第2表21番	石材→チャート	石材→ホルンフェルス
p. 26 第2表22番	石材→ホルンフェルス	石材→チャート

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書は平成20～21年度にかけて実施した銀座第1遺跡（五次調査）の発掘調査報告書であります。

今回の五次調査では、旧石器時代から近世にかけての遺構・遺物が確認されました。特に、縄文時代早期の陥し穴状遺構が検出されたことで、遺跡周辺で狩猟が行われていたことが分かりました。

また、弥生時代の竪穴建物跡や中世の掘立柱建物跡・竪穴建物跡が検出され、検出された遺構やその周辺から土器や陶磁器など、当時の様子を知るための遺物が確認できました。これらのこととは当地の歴史を考える上で重要な資料となります。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関および地元の方々に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成23年1月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 森 隆茂

例　言

- 1 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、平成20-21年度に実施した児湯郡川南町所在の銀座第1遺跡（五次）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は西日本高速道路株式会社（NEXCO西日本）九州支社宮崎工事事務所の委託により、宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地での実測・写真撮影等の記録は、主に吉野達三、松本茂、重留康宏、深江龍哉が行った。
- 4 整理作業は、遺物洗浄、注記、接合、実測、トレースを整理作業員が行った。土器類の分類は松林豊樹の助言を得、石器類の分類や石材同定および石器実測は松本茂が行い、陶磁器類の分類については堀田孝博、松林豊樹、鉄製品については柳田晴子の助言を得た。なお、本書で使用した遺物写真は吉野達三が撮影した。
- 5 次の業務はそれぞれ業者に委託した。

基準点測量・グリッド杭設置	：（有）進藤測量設計事務所
空中写真撮影	：（有）ふじた
- 6 本書で使用した周辺遺跡位置図は国土地理院発行の5万分の1図をもとに、周辺地形図等はNEXCO西日本九州支社宮崎工事事務所から提供の1,000分の1図をもとに作成した。
- 7 国土座標は平面直角座標第II系（世界測地系）に基づく。また、標高は海拔絶対高である。
- 8 本書で使用した方位は座標北（G.N.）を基準にし、位置図等の一部に磁北（M.N.）を使用した。
- 9 土層断面・土器等の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。
- 10 本書の執筆・編集は、土器・鉄製品・本文を吉野達三、石器を松本茂が行い、装飾高杯を今塩屋毅行が担当した。
- 11 出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。



銀座第 1 遺跡(五次)発掘調査区遠景 南西から北東を臨む



S1・S51(竪穴建物跡) 完掘状況



南区東壁土壙断面 (鬼界アカホヤ火山灰層堆積状況)

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の経過と方法	5
第1節 事前調査	5
第2節 調査区の設定と調査経過	6
第3節 整理作業及び報告書作成	6
第Ⅳ章 五次調査の記録	8
第1節 調査の概要	8
第2節 基本層序	11
第3節 旧石器時代～縄文時代早期の遺構と遺物	13
1 旧石器時代～縄文時代早期の概要	13
(1) 南区の概要	13
(2) 北区の概要	13
2 遺構と遺物	13
(1) 自然流路跡	13
ア 旧石器時代	13
イ 縄文時代早期	13
(2) 陥し穴状遺構	16
(3) 集石遺構	19
(4) 上坑	19
3 遺物	21
(1) 南区出土石器	21
(2) 北区出土石器	21
(3) 事前調査時出土石器	21
第4節 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物	27
1 弥生時代～古墳時代の概要	27
2 遺構と遺物	27
(1) 竪穴建物跡	27
S1・S51 ア遺構 イ遺物	27
S95・S44 ア遺構 イ遺物	38
第5節 中世～近世の遺構と遺物	43
1 中世～近世の概要	43
2 遺構と遺物	43
(1) 竪穴建物跡	43
S2 ア遺構 イ遺物	43
S3 ア遺構 イ遺物	43
S4 (竪穴建物跡)・S5-S6 (上坑)	43
(2) 挖立柱建物跡	47
S262 ア遺構 イ遺物	47
S263 ア遺構 イ遺物	47
S264 ア遺構 イ遺物	47
(3) 南区出土土器	47
第6節 その他の遺構と遺物	50
1 遺構	50
2 遺物	51
第Ⅴ章 五次調査のまとめ	56
1 旧石器時代	56
2 縄文時代早期	56
3 弥生～古墳時代	56
4 中世～近世	56
5 近代～現代	56
第Ⅵ章 総括	58
1 旧石器時代	58
2 縄文時代早期	58
3 弥生～古墳時代	58
4 中世～近世	58

挿 図 目 次

第 1 図 宮崎県兒湯郡川南町の概略図	2
第 2 図 銀座第 1 遺跡と周辺遺跡位置図	3
第 3 図 事前調査トレーン配置図	5
第 4 図 銀座第 1 遺跡調査区配置図	7
第 5 図 南区 k-Ah 上而検出遺構分布図	9
第 6 図 北区遺構・遺物分布図(AT上而検出)	10
第 7 図 南区遺構・遺物分布図(AT上而検出)	10
第 8 図 南区調査深度図	10
第 9 図 南区土層断面位置図	12
第 10 図 南区土層断面位置図	12
第 11 図 南区土層断面実測図	14
第 12 図 南区自然路跡分布図	14
第 13 図 北区土層断面実測図	15
第 14 図 北区自然路跡分布図	15
第 15 図 S102(陥し穴状遺構)実測図	16
第 16 図 S103(陥し穴状遺構)実測図	17
第 17 図 S104(陥し穴状遺構)S108(土坑)・ S112(陥し穴状遺構)実測図	18
第 18 図 S104出土石器実測図	18
第 19 図 集石遺構実測図	19
第 20 図 土坑実測図	20
第 21 図 南区旧石器時代～縄文時代早期 出土石器実測図	22
第 22 図 南区縄文時代早期出土石器実測図	23
第 23 図 北区旧石器時代～縄文時代早期 出土石器実測図	24
第 24 図 事前調査旧石器時代～縄文時代早期 出土石器実測図	25
第 25 図 S1・S51(竪穴建物跡)実測図	28
第 26 図 S1出土土器実測図①	30
第 27 図 S1出土土器実測図②	31
第 28 図 S1出土土器実測図③	32
第 29 図 S1出土土器実測図④	33
第 30 図 S1出土土器実測図⑤	34
第 31 図 S1出土土器実測図①	34
第 32 図 S1出土土器実測図②	35
第 33 図 S51出土土器実測図	35
第 34 図 S95・S44(竪穴建物跡)実測図	39
第 35 図 S95出土土器実測図	40
第 36 図 S95出土土器実測図①	40
第 37 図 S95出土土器実測図②	41
第 38 図 S44出土土器実測図	41
第 39 図 S44出土土器実測図	41
第 40 図 調査区内出土土器実測図	41
第 41 図 S2(竪穴建物跡)実測図	44
第 42 図 S2出土土器・須恵器・瓦質土器 実測図	44

第 43 図 S2出土鉄製品実測図	45
第 44 図 S3(竪穴建物跡)実測図	45
第 45 図 S3出土土器・須恵器・瓦質土器 石器実測図	45
第 46 図 S4(竪穴建物跡)、S5・S6(土坑)、 S46一部(溝状遺構)実測図	46
第 47 図 振立柱建物跡実測図 S262・S263・S264	48
第 48 図 S262・S264出土土器実測図	49
第 49 図 中世 南区出土土器実測図	49
第 50 図 S36(土坑)実測図	50
第 51 図 S46(溝状遺構)及び周辺遺構実測図	52
第 52 図 S49(土坑)出土遺物実測図	52
第 53 図 中世～近世調査区内出土遺物実測図	53
第 54 図 近世以降調査区内出土遺物実測図	55
第 55 図 装飾高环(宮崎県内出土)実測図	57
第 56 図 銀座第 1 遺跡(一～五次) 遺構分布図(中世)	59
第 57 図 銀座第 1 遺跡(一～五次) 遺構分布図(近世)	60

表 目 次

第 1 表 東九州自動車道(都農～西都原) 基本層序 [銀座第 1 遺跡(五次)]	
川南町域・新富・高鍋域との比較	11
第 2 表 石器計測表	26
第 3 表 土器観察表	36～37
第 4 表 石器計測表	37
第 5 表 土器観察表	42
第 6 表 石器計測表	42
第 7 表 鉄製品計測表	42
第 8 表 遺物観察表(土師器・須恵器・陶磁器・瓦質土器)…	46
第 9 表 石器計測表	46
第 10 表 鉄製品計測表	46
第 11 表 土師器観察表	50
第 12 表 遺物観察表(土器・陶磁器)…	52
第 13 表 遺物観察表(土器・土師器・須恵器 ・陶磁器・瓦質土器)…	54
第 14 表 鉄製品計測表	54
第 15 表 近代出土遺物観察表	54
第 16 表 石器計測表	54
第 17 表 装飾高環 (宮崎県出土)観察表	57

図版目次

巻頭図版 1

- 銀座第1遺跡(五次)発掘調査区遠景 南西から北東を臨む

巻頭図版 2

- S1・S51(竪穴建物跡)完掘状況
○ 南区東壁土層断面(鬼界アカホヤ火山灰層堆積状況)

巻末図版 1 61

- S1(竪穴建物跡)遺物検出状況
○ S1(竪穴建物跡)完掘状況
○ S95・S44(竪穴建物跡)完掘状況
○ S2(竪穴建物跡)完掘状況
○ S3(竪穴建物跡)完掘状況
○ S4(竪穴建物跡)、S5・S6(土坑)、
S46(溝状遺構)完掘状況

巻末図版 2 62

- S102(階し穴状遺構)
埋土堆積状況
○ S103(階し穴状遺構)
完掘状況
○ S112(階し穴状遺構)
検出状況
○ S260(集石遺構)
検出状況
○ S112(土杭)完掘状況
○ S111(土杭)完掘状況

巻末図版 3 63

- 南区 土層断面
(k-Ah堆積状況)中央部西より
○ 北区 土層断面
(AT上擾乱状況)南部北東より
○ 南区土層断面
(AT堆積状況)北東部南西より
○ 南区
(AT面傾斜堆積状況)中央部北西より

巻末図版 4 64

- S104出土遺物(剥片)「1」
○ 南区
旧石器～縄文時代早期出土遺物①
「2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12」
○ 南区
旧石器～縄文時代早期出土遺物②
「13,14,15,16,17,18,19,20」

○ 北区

- 旧石器～縄文時代早期出土遺物
「21,22,23,24,25,26,27,28」

○ 事前調査

- 旧石器～縄文時代早期出土遺物①
「29,30,31」

○ 事前調査

- 旧石器～縄文時代早期出土遺物②
「32,33,34,35,36,37,38,39,40」

○ S1(竪穴建物跡)出土遺物①

- 「41,42,43」

○ S1(竪穴建物跡)出土遺物②

- 「44,45,46,47」

巻末図版 5 65

- S1(竪穴建物跡)出土遺物③
「48,49」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物④
「50,51,52,53」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物④
「54,55,56,57,58」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑤
「59,60,61」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑥「62」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑦「63」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑧「64」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑨「65」

巻末図版 6 66

- S1(竪穴建物跡)出土遺物⑩「66」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑪「67」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑫「68」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑬「69」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑭
「70,71,73,74」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑯「72,75」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑰「76,77」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑱「78」

巻末図版 7 67

- S1(竪穴建物跡)出土遺物⑲「79」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物⑳「80」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物㉑「81」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物㉒「82」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物㉓「83」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物㉔
「84,85,86,87」
○ S1(竪穴建物跡)出土遺物㉕「88」

○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物② 「89.90.91」	
卷末図版 8	68
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑨「92」	
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑨「93」	
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑧「94,101,102」	
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑨「95」	
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑨「96,97」	
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑨「98」	
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑨「99」	
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑨「100」	
卷末図版 9	69
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑩「103」	
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑩「104,105」	
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑩「106」	
○ S1(竪穴建物跡) 出土遺物⑩「107」	
○ S51(竪穴建物跡) 出土遺物「108」	
○ S95(竪穴建物跡) 出土遺物①「109」	
○ S95(竪穴建物跡) 出土遺物②「110,111,112」	
○ S95(竪穴建物跡) 出土遺物③「113」	
卷末図版 10	70
○ S95(竪穴建物跡) 出土遺物③ 「114,115,116,118」	
○ S95(竪穴建物跡) 出土遺物⑤「117,119」	
○ S95(竪穴建物跡) 出土遺物⑥「120」	
○ S95(竪穴建物跡) 出土遺物⑦「121,122」	
○ S95(竪穴建物跡) 出土遺物⑧「123,124」	
○ S95(竪穴建物跡) 出土遺物⑨「125」	
○ S95(竪穴建物跡) 出土遺物⑩「126」	
○ S44(竪穴建物跡) 出土遺物①「127,128」	
卷末図版 11	71
○ S44(竪穴建物跡) 出土遺物②「129,130」	
○ S44(竪穴建物跡) 出土遺物③「131」	
○ 南区Ⅱ層出土遺物「132」	
○ S2(竪穴建物跡) 出土遺物①「133」	
○ S2(竪穴建物跡) 出土遺物②「134,135,137」	
○ S2(竪穴建物跡) 出土遺物③「136」	
○ S3(竪穴建物跡) 出土遺物①「138,139,140」	
○ S3(竪穴建物跡) 出土遺物②「141」	
○ S3(竪穴建物跡) 出土遺物③「142」	
卷末図版 12	72
○ S3(竪穴建物跡) 出土遺物④「143」	
○ S262・S264(掘立柱建物跡) 出土遺物① 「144,145,146,147,148,149」	
○ S262・S264(掘立柱建物跡) 出土遺物② 「150,151,152,153」	
○ 中世：南区出土遺物①「154,155,156」	
○ 中世：南区出土遺物②「157」	
○ 中世：南区出土遺物③「158,159,160,161,162」	
○ 中世：南区出土遺物④「163,164」	
○ S49(土杭) 出土遺物 「165,166」	
卷末図版 13	73
○ 南・北区表土・Ⅱ層一括出土遺物① 「167,168,169」	
○ 南・北区表土・Ⅱ層一括出土遺物② 「170,171,172,173,174」	
○ 南・北区表土・Ⅱ層一括出土遺物③ 「175,176」	
○ 南・北区表土・Ⅱ層一括出土遺物④「177」	
○ S229(ピット)「178」 南区Ⅱ層P3グリッドⅡ層一括出土遺物 「179,180」	
○ 南区表土・グリッドⅡ層一括出土遺物 「181,182,183,184,185」	
○ 北区表土・南区グリッドⅡ層一括出土遺物 「186,187,188,189,190」	
○ 南区グリッドⅡ層一括出土遺物「191」	
卷末図版 14	74
○ 南区グリッドⅡ層「192」	
北区表土一括出土遺物「193」	
○ 南区攤乱「194」	
北区表土一括出土遺物「195,196,197」	
○ 事前北区「198」北区「199」	
南区表土一括出土遺物「200」	
○ 宮崎県児湯郡川南町出土 装飾高环「201」	

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道(門川～西都間 59km)は、平成8年12月国土開発幹線自動車道建設会議において整備計画区间に決定した。そのうち都農～西都間25kmについて、平成9年12月に建設大臣(現国土交通大臣)より日本道路公団へ施行命令が発令された。一方、宮崎県教育委員会では平成10年度に同路線上の分布調査を行い、79遺跡の所在を確認した。そして、平成11年度から日本道路公団九州支社との間で委託契約を締結し、宮崎県埋蔵文化財センターが用地買収の進捗に合わせて事前調査、本調査を実施し、現在に至っている。なお、日本道路公団は分割民営化され、平成17年10月1日から西日本高速道路株式会社九州支社宮崎工事事務所・延岡高速道路事務所となった。

銀座第1遺跡(一次～四次調査)は、平成14年度の発掘調査に始まり四次調査の終了する平成16年度まで、3年間の歳月を要した。この間、中・近世の溝状遺構に囲まれた集落跡や縄文～弥生時代の様々な遺物が確認されている。

本遺跡(五次調査)では平成16年度に対象区の事前調査が実施され、縄文時代早期の遺物や弥生時代の竪穴建物跡等の遺構の存在が確認された。これを受け平成20年8月から2,500m²を対象に発掘調査を開始した。また、平成20年11月には隣接する過密植栽部分の伐採が終了し引き渡しが行われたため、事前調査を実施したところ、縄文時代早期とみられる遺構や遺物が確認された。このため、本遺跡(五次調査)では当初の対象区と過密植栽部分で遺構・遺物の確認される範囲1,100m²を合わせて対象面積を3,600m²に拡張し発掘調査を実施することとした。

本調査は平成20年7月28日から平成21年4月8日まで実施した。

第2節 調査の組織

銀座第1遺跡の調査組織は次のとおりである。

【調査主体】宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター

平成16年度

所長	宮園 淳一
副所長兼総務課長	大蘭 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
調査第一課長	高山 富雄
総務課主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第一課調査第一係長	谷口 武範
主幹兼調査第二係長	長津 宗重

平成20-22年度

所長	福永 展幸 (H20-H21)
	森 隆茂 (H22)
副所長	加藤 悟郎 (H20)
副所長兼総務課長	長友 英詞 (H20-H21)
副所長	北郷 泰道 (H22)
総務課長	矢野 雅紀 (H22)
調査第一課長	長津 宗重 (H20-H22)
総務課	
主幹兼総務担当リーダー	高山 正信 (H20-H21)
副主幹兼総務担当リーダー	長友由美子 (H22)
調査第一課	
副主幹兼調査第一担当リーダー	南中道 隆 (H20)
	飯田 博之 (H21-H22)

〔事前調査担当〕(平成16年度)

調査第一課調査第二係主事 三品 典生

〔本調査担当〕(平成20年度)

調査第一課

調査第一担当主査	吉野 達三
調査第一担当主任主事	松本 茂
調査第一担当主任主事	重留 康宏
調査第一担当主事	深江 龍哉

〔整理作業・報告書作成担当〕(平成21～22年度)

調査第一課

調査第一担当主査	吉野 達三
----------	-------

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

川南町は宮崎県中央・沿海部に位置する(第1図)。本町は、上面木山(標高 897m)から東側に派生する山地・丘陵面と、東麓から海岸線にかけて緩やかに傾斜しながら広がる段丘面とからなり、面積は 90.27km²である。この地域の段丘面は冲積扇状地であり、河川の浸食作用による崖や谷で区切られた状態で分布し、青鹿面、唐瀬原面、川南原面など 14 の面から構成されている。

銀座第1遺跡は、川南町の中心市街地より北西へ約 3km、児湯郡川南町大字川南字沓袋畑に所在する。ここは、北西から南東へ続く唐瀬原面の緩斜面上にあり、中央部から西側丘陵面にかけて続くなだらかな谷地形の部分に位置している(第2図)。

五次調査区は銀座第1遺跡(四次)発掘調査区の北東部に隣接し、調査区の標高は約 127 mで、唐瀬原面の緩斜面に沿った町道で南北調査区に分かれている。

第2節 歴史的環境

本遺跡の周辺では、東九州自動車道の建設に伴う調査などにより発掘調査された遺跡が増えている。本節では本遺跡を取り巻く遺跡に

ついて大まかに旧石器時代、縄文時代、弥生～古墳時代、歴史時代に分けて概観する(第2図)。

1 旧石器時代

大野寅夫氏の踏査や川南町育委員会が行った分布調査では、旭ヶ丘遺跡、谷ノ口遺跡、椎原遺跡、大久保遺跡、卒手遺跡等で遺物が採集されている。平成 5 ~ 12 年にかけ川南町教育委員会は後牢田遺跡の調査を行った。この遺跡は西日本における旧石器時代最古の遺跡である。ここでは、中期旧石器時代前半から後期旧石器時代後半に渡る 7 つの文化層が確認され、この時代の研究に大きな成果を残している。

この他にも藏庄村遺跡、霧島遺跡が挙げられ、本町の旧石器時代の遺跡の多くが町内の山地や丘陵部に多く分布するという特徴を示していた。

東九州自動車道建設に伴う遺跡発掘調査では、A T 下位～上位にわたり多くの成果が見られる。A T 下位では、中ノ迫第1・市納上第2遺跡で礫群が確認されている。A T 上位では、本遺跡近隣の虚空蔵免遺跡で礫群 2 基とナイフ形石器・角錐状石器・細石刃核等が、赤石・天神本遺跡でも礫群 2 基が確認され、ナイフ形石器・角錐状石器・細石刃核が出土している。



第1図 宮崎県児湯郡川南町の概略図





- 1 銀座第1遺跡 2 旭ヶ丘遺跡 3 谷ノ口遺跡 4 椎原遺跡 5 大久保遺跡 6 卒手遺跡
 7 後牟田遺跡 8 蔵座村遺跡 9 露島遺跡 10 中ノ迫第1遺跡 11 市納上第2遺跡 12 虚空藏免遺跡
 13 赤石・天神本遺跡 14 上ノ原遺跡 15 尾花A遺跡 16 前ノ田村上第2遺跡 17 国光原遺跡 18 尾花板上遺跡
 19 中ノ迫第3遺跡 20 把言田遺跡 21 中ノ迫A遺跡 22 野稻尾遺跡 23 東平下遺跡 24 川南古墳群
 25 上ノ原北分B遺跡 26 松山城跡 27 南原A遺跡 28 湯牟田遺跡 29 西ノ別府遺跡 30 前ノ田村上第1遺跡
 31 中ノ迫第2遺跡

第2図 銀座第1遺跡と周辺遺跡位置図(1/50,000)

2 繩文時代

当初、川南町における縄文時代の遺跡は非常に少なかったが、後牟田遺跡・霧島遺跡・上ノ原遺跡等の発掘調査で、早期の遺構・遺物が確認されてきた。さらに東九州自動車道建設に伴う発掘調査によりその数は急速に増加してきた。赤石・天神本遺跡や前ノ田村上第2遺跡、国光原遺跡では草創期の隆帯土器が、市納上第2遺跡や尾花坂上遺跡、中ノ迫第3遺跡、国光原遺跡では早期の集石遺構がそれぞれ確認され、押型土器等が出土している。また、赤石・天神本遺跡では、後・晚期の竪穴建物跡と集石遺構が確認されている。銀座第1遺跡(三次調査)では、尾鈴山酸性岩類の礫で構成された早期の集石遺構が8基確認され、土器片と石器片が出土している。縄文時代の遺跡も旧石器時代と同様に山地や丘陵部に分布している。

3 弥生～古墳時代

弥生時代には、台地や丘陵地縁辺部に中期から後後にかけての遺跡の分布が見られるようになる。前期の遺跡は確認されていないが、藏座村遺跡において竪穴建物跡から中溝式土器が出土している。中期の遺跡では、竪穴建物跡が確認された中ノ迫第2遺跡、後期から終末期の遺跡では、竪穴建物跡が確認された把言田遺跡、中ノ迫第1遺跡(二次)、中ノ迫A遺跡、上ノ原遺跡、竪穴建物跡と周溝状遺構が確認された野稲尾遺跡、円形及び方形の周溝墓が確認された東平下遺跡などの調査例がある。最近の調査例では、弥生中期から古墳時代にかけて大規模な集落を形成していた尾花A遺跡があげられる。

古墳時代の遺跡では、国指定史跡の川南古墳群があり、弥生時代終末期から古墳時代にかけて大規模な社会集団の存在を想定できる。銀座第1遺跡周辺では、同古墳群第5号墳(前方後円墳)を有する上ノ原北分B遺跡があり、須恵器の無蓋高環等出土からもこの地域の古墳が当時の首長の墓域であったと考えられる。

4 歴史時代

古代では、奈良時代後半から平安時代前期に比定される藏骨器を伴う上垂門の火葬墓や、

戰国期の宗麟原供養塔、戰国末期における城郭として松山城跡などが知られている。また、去飛(都農町)の駅から、前ノ田(川南町)そして児湯(木城町高城)の駅を結ぶ古代官道の存在も推定されている。

中世においては、東九州自動車道の建設に伴う発掘調査で、前ノ田村上第1遺跡や銀座第1遺跡(一～四次)において中世～近世の居館及び聚落・溝状遺構等が検出されている。

近代から現代にかけては、大規模な開拓と農業構造改善事業が進められている。特に太平洋戦争前後には全国から多くの入植者が移住し、このことが現在「川南合衆国」と呼ばれる所以になっている。また、戦争遺跡として旧日本陸軍落下傘部隊基地内の給水塔も存在している。

【引用・参考文献】

川南町教育委員会

- ・1983「川南町史」
- ・1983「川南の埋蔵文化財 遺跡詳細分布調査報告書」
- ・2002「後牟田遺跡 宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器の研究」後牟田遺跡調査団
- ・1993「松山城跡」「川南町文化財報告」5
- 宮崎県埋蔵文化財センター
- ・2001「藏座村遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第53集
- ・2006「市納上第1遺跡 市納上第4遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第121集
- ・2008「市納上第2遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第170集
- ・2008「中ノ迫第2遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第167集
- ・2006「銀座第1遺跡(一・二・三・四次調査)」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第120集

第Ⅲ章 調査の経過と方法

第1節 事前調査

銀座第1遺跡は、これまでの一次～四次調査で中・近世を中心とした遺構（溝状遺構・掘立柱建物跡・土壙墓など）が報告されている。溝状遺構は掘立柱建物跡を囲む形で検出されており、区画溝としての役割が考えられた。また縄文時代の集石遺構や弥生から古墳時代の土器も確認されており、近隣に当該期の集落の存在が想定されていた。

事前調査は、平成16年9月1日から10月28日と、平成20年11月17日から18日の2回に分けて実施し、対象面積はそれぞれ16,700m²と3,240m²であった。

平成16年度に行った調査では、A区で細石刃1点が、B区でナイフ形石器1点と打製石鏃2点とが出土した。しかし、両区共に大部分が削平を受けており、遺物包含層と考えられる層は一部が残存するのみであった。また、同区内で遺構は検出されず、出土遺物の総数も10点に満たなかったため、包含する遺物の密度もかなり希薄であると考えられた。

C区は宅地造成により激しく改変されており、遺構は検出されず遺物も出土しなかった。

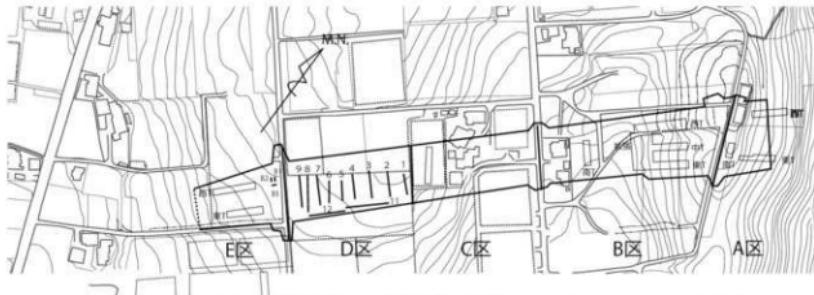
E区では、第II層（K-Ah）上面で竪穴建物跡を1軒確認した。また、第I層中から弥生時代後期や中世後半から近世にかけての土器・陶磁器が多数出土した。これらの結果から、E区内に第III層（K-Ah）上位を第II文化層（弥生時代～古墳時代）、礫と打製石鏃が出土した第IV層（AT）

上位を第I文化層（旧石器時代～縄文時代早期）とし、2,500m²を調査対象面積とした。

平成20年度には2回目の事前調査を行った。これは、D区（面積3,240m²）の事前調査であり、銀座第1遺跡（五次）調査と並行して実施した。ここでは、対象範囲に東西と南北方向に計11箇所のトレーンチ（第3図）を設定し、重機による表土掘削と人力による精査を行った。この結果、ほとんどのトレーンチで削平がAT付近まで及ぶことが判明した。AT面の傾斜が北から南へ緩やかに下る斜面であることを考慮すると、KAh面も同様の傾斜であったと推定されるが、全体的に耕作深度がKAh層を越えているためこの面での遺構検出は困難であると考えられた。そこで、表土中からの遺物も皆無に近い5T以北を調査の対象から除外し、土器片が確認され一部III層（KAh）面の残存が観察される南半の1,100m²について本調査の対象とした。遺構検出面は、III層（KAh）上面（弥生時代～古墳時代）・AT上面（旧石器時代～縄文時代早期）としたが、AT下位に関しては調査の進捗に合わせ、再度トレーンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認することにした。

また、同時期にカルバートボックス設置部分の事前調査としてE区北部にB1-B3のトレーンチ（第3図）を設定し、人力で精査を行った。この部分も上部はトレーンチャーの攪乱を受け、AT面まで遺構・遺物は確認されなかった。

これらの結果を受け、銀座第1遺跡（五次調査）は、調査面積を3,600m²とした。



第2節 調査区の設定と調査経過

1 調査区の設定

調査区は町道を夾み南区・北区と設定した。
グリッド杭は座標第I系を基準として10m間隔で設定した(第4図)。

2 調査経過(調査日誌抄)

○ 南区

(期間) 平成20年7月28日～平成21年4月8日

20.7.28 重機による表土剥ぎ開始。(-7.31)

7.30 深掘りトレチを掘削し基本土層を確認。

8.4 作業員ヘオリエンテーションを実施後作業を開始。調査区周囲にガードフェンスを設置。同フェンスの耐風養生を実施。

8.5 遺構の精査を開始。

8.21 事前調査のトレチ跡を完掘。トレチの南延長部から装飾高环片、鉄器(鍊)、土器等が出土。

9.3 竪穴建物跡S1を検出。

9.12 台風13号接近に備えて耐風養生を実施。

9.30 台風15号接近に備えて耐風養生を実施。

10.3 竪穴建物跡S2・S3・S4、土坑S36を検出。

10.10 竪穴建物跡、土坑の実測を開始。

10.16 ピットを検出。半戻後平板にて遺構分布図の作成を開始。

10.21 教職経験10年経過研修として発掘作業体験研修を実施。

10.29 ピット等の半戻を開始。溝状遺構を検出。

10.30 竪穴建物跡S1の遺物取り上げを実施。

11.6 カルバートボックス設置部分の事前調査を実施。

11.11 空中写真撮影を実施。

11.12 竪穴建物跡S1の実測を開始。

11.19 重機による第III層K-Ah面除去を開始。

12.3 竪穴建物跡S95・S44を検出。実測を開始。

11.20 第IV層面の精査を開始。

12.11 繩文時代早期以前の遺物取り上げを開始。

12.15 第IV層から第V層へのグリッド25%掘り下げを開始。

12.16 据立柱建物跡の実測を開始。

21.1.14 陥し穴状遺構S102～S104、土坑S105～S109を検出し実測を開始。

4.8 南区埋め戻し終了。

○ 北区

(期間) 平成21年1月13日～平成21年4月8日

21.1.13 重機による表土剥ぎ開始。(-1.26)

1.14 調査区周辺にガードフェンスを設置。同フェンスの耐風養生を実施。

1.26 北区調査区内にグリッド杭を設置。

1.27 第IV層から第V層へのグリッド25%掘り下げを実施。

1.29 第V層上面にて剥片やナイフ形石器を検出。

2.2 第V層上面にて剥片や黒曜石片を検出。

2.5 北区南側の土層断面図を作成。

2.9 北区中央トレチの断面図と北区西側土層断面図を作成。自然流跡路を確認。

2.20 陥し穴状遺構S112と土坑S110・S111を検出。実測を開始。

4.8 北区埋め戻し終了。

第3節 整理作業及び報告書作成

1 整理作業

整理作業は当センター本館において以下の工程で行った。

○ 平成21年4月～5月

・遺物(石器、土器、陶磁器)の水洗、注記

○ 平成21年5月～8月

・遺物(土器、陶磁器)の接合

○ 平成21年8月～10月

・報告書掲載遺物(石器、土器、陶磁器)の実測

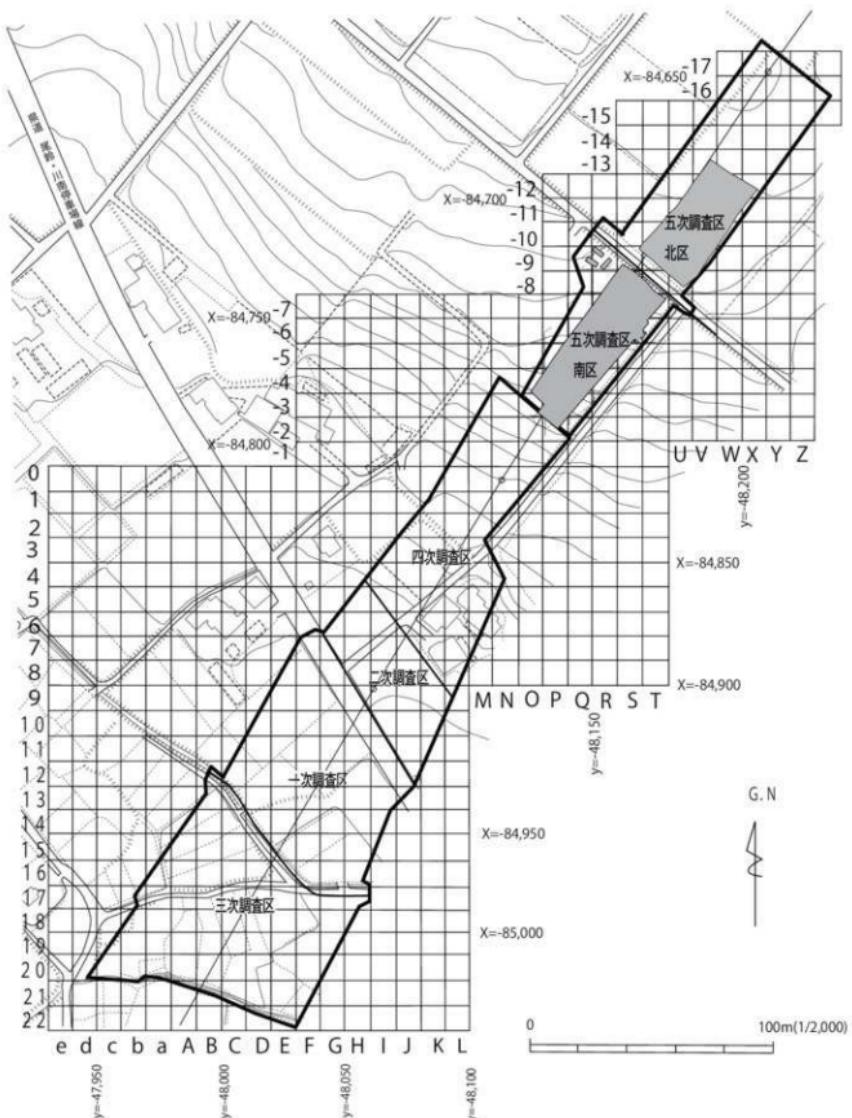
○ 平成21年10月～12月

・報告書掲載遺物(石器、土器、陶磁器)及び遺構分布図等のトレース

・報告書掲載遺物(鉄器)の実測及びトレース

2 報告書作成

報告書作成は整理作業と平行して行い、平成22年9月に作成を完了した。



第4図 銀座第1遺跡調査区配置図 (1/2,000)

第IV章 五次調査の記録

第1節 調査の概要

銀座第1遺跡(五次)は、調査面積3,600m²を対象に、後期旧石器時代～縄文時代早期の包含層を第I文化層、弥生時代～古墳時代の包含層を第II文化層と設定し、平成20年7月から約10ヶ月に渡って実施した。

調査は、まず重機で表土を約0.4～1m程度剥ぎ、深掘りトレーニングを設定した。その結果、客土が1m以上堆積している部分があることや、対象面積の北側半分が、表上下からK-Ah層にかけてトレーニングによる搅乱を激しく受けていることが判明した。この後、発掘作業員を投入し第II文化層の精査を開始した。ここでは、II層クロボク面から精査を始め、III層(k-Ah)面で遺構検出を行った。遺構残存状況は比較的良好であったが、中にはトレーニングによる搅乱の影響を受け、全体を把握できない遺構も見られた。遺構には帰属時期を推定できる遺物を伴うものがあった(第5図)。

平成20年11月19日より重機でIII(K-Ah)層剥ぎを開始し、終了後発掘作業員でIV層黒褐色ローム面からV層暗褐色ローム面、そしてVI層明褐色ローム(始良Tn)面まで、調査区内のグリッド毎に25%の範囲を設定し精査を開始した。精査開始後第I文化層では、後期旧石器時代～縄文時代早期の遺物や、縄文時代早期と推定される遺構や自然流路など当時の旧地形等が伺える層の堆積などが見られた(第6図・第7図)。

ここではグリッド25%の範囲で遺物を検出した場合、検出範囲を広げ周囲のグリッドを掘り下げていくこととした。各グリッドの調査深度は第8図の通りである。

南区の遺構としては、竪穴建物跡7軒、掘立柱建物跡3棟、溝状遺構1条、土坑9基、集石遺構2基、陥れ穴状遺構3基、出土遺物の認められた土坑(2基)やピット(9基)、その他138基のピットを検出した。更に、土層の堆積状況や変色域などから、自然流路跡を確認した。遺物は、竪穴建物跡から出土した弥生土器を中心

に、中世の土師器、中近世の陶磁器・石器・鉄製品等が出土した。

町道より南側を調査中に北側隣接地D区の事前調査を実施した。この調査は、東九州自動車道(都農～西都間)建設用地内ではあるものの、過密植栽がなされた部分であり、平成16年度に実施した事前調査から除外されていた部分であったが、樹木の伐採が行われたため、対象地域内の土層の確認や遺構分布・遺物確認のために急速実施したものであった。

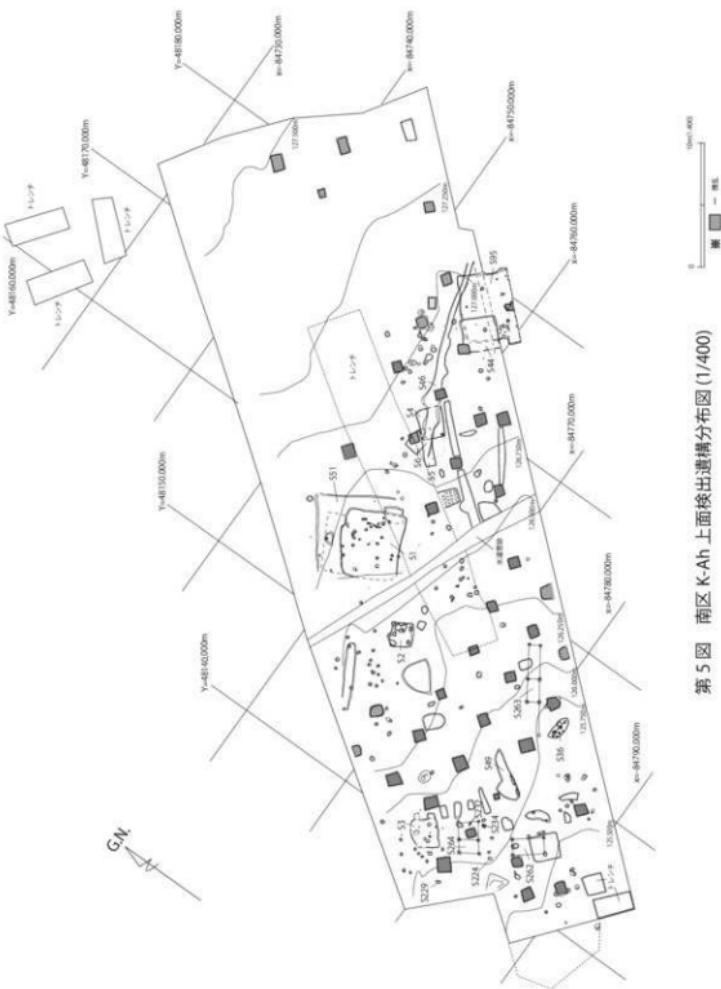
平成20年11月17日～18日に実施した事前調査では、用地内に11本に渡るトレーニングを設定し精査を行った。その結果、第I文化層の存在が確認された。当初この調査区は平成21年度に調査予定であったが、関係機関との協議の上、銀座第1遺跡(五次)調査の延長として実施することが決まった。これを受けて、調査区を町道を境に南区と北区に分け、調査期間を延長し、平成21年1月16日より北区の発掘調査を開始した。

北区は客土が1mを越える部分が大半を占めており、重機による除去を行い精査を実施した。その結果、遺構としてVI層明褐色ローム(AT)上面で縄文時代早期相当の陥れ穴状遺構1基と土坑2基を検出した。さらに、調査区方向の土層断面による土層の堆積状況と明褐色ローム層(AT)上の変色域の状況から南区に繋がると思われる自然流路跡を確認した。

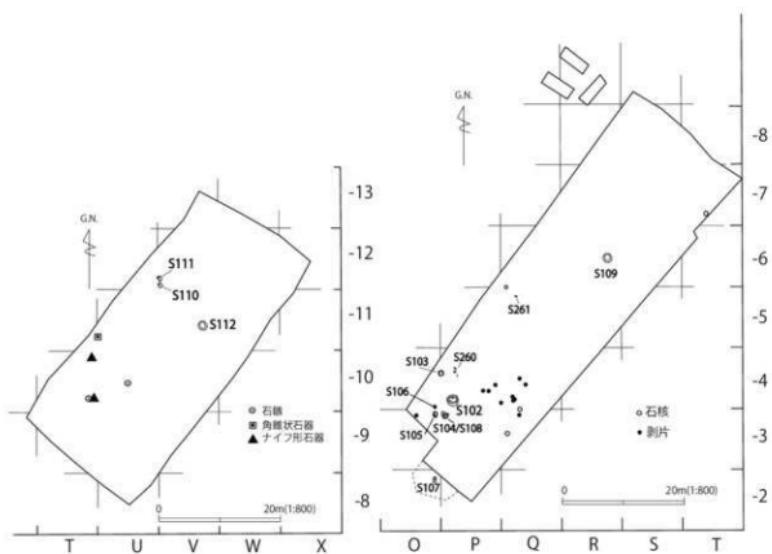
遺物は、表土中から銭貨や水注、キセル等が出土した。V層暗褐色ローム上位からは打製石器や剥片が、VI層明褐色ローム(AT)上位からは後期旧石器時代相当のナイフ形石器が数点出土した。南区と北区は第I文化層で陥れ穴状遺構を検出した。

埋め戻しは平成21年2月23日～2月25日と平成21年4月6日～4月8日の期間で行い遺跡全体の調査を終了した。

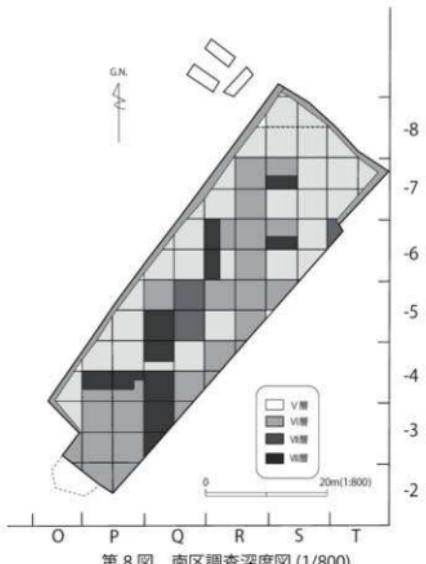
以後五次調査の詳細を記述する。



第5図 南区K-Ah上面換出遺構分布図(1/400)



第6図 北区遺構・遺物分布図 (AT上面検出) (1/800) 第7図 南区遺構・遺物分布図 (AT上面検出) (1/800)



第8図 南区調査深度図 (1/800)

第2節 基本層序

銀座第1遺跡(五次)調査区は、なだらかな谷地形を形成する斜面上に位置している。このため調査区内では不安定な土層の堆積を呈する場所が多く、場所により堆積状況が異なっている。

南区では、表土を剥いた状態でトレッシャーによる搅乱が北側のほぼ全域で見られた。同区中央部から南側にかけて鬼界アカホヤ層(K-Ah)と黒褐色ローム層の堆積が見られた(第9図A-B)。

黒褐色ローム層下位には暗褐色ローム層が堆積していたが、南区ではML1相当の暗褐色ローム層や小林鉱石を含む層、更にML1より黒味が強いML1相当暗褐色ローム層の堆積が見られた(第9図C-D)。

明褐色ローム層(AT)上面では、水成変成に起因する変色層が確認され、明褐色ローム層(AT)の堆積が無い部分も見られた。表土から1.0m以下の深さには赤褐色ローム層が堆積していた(第9図E-F,H-G)。

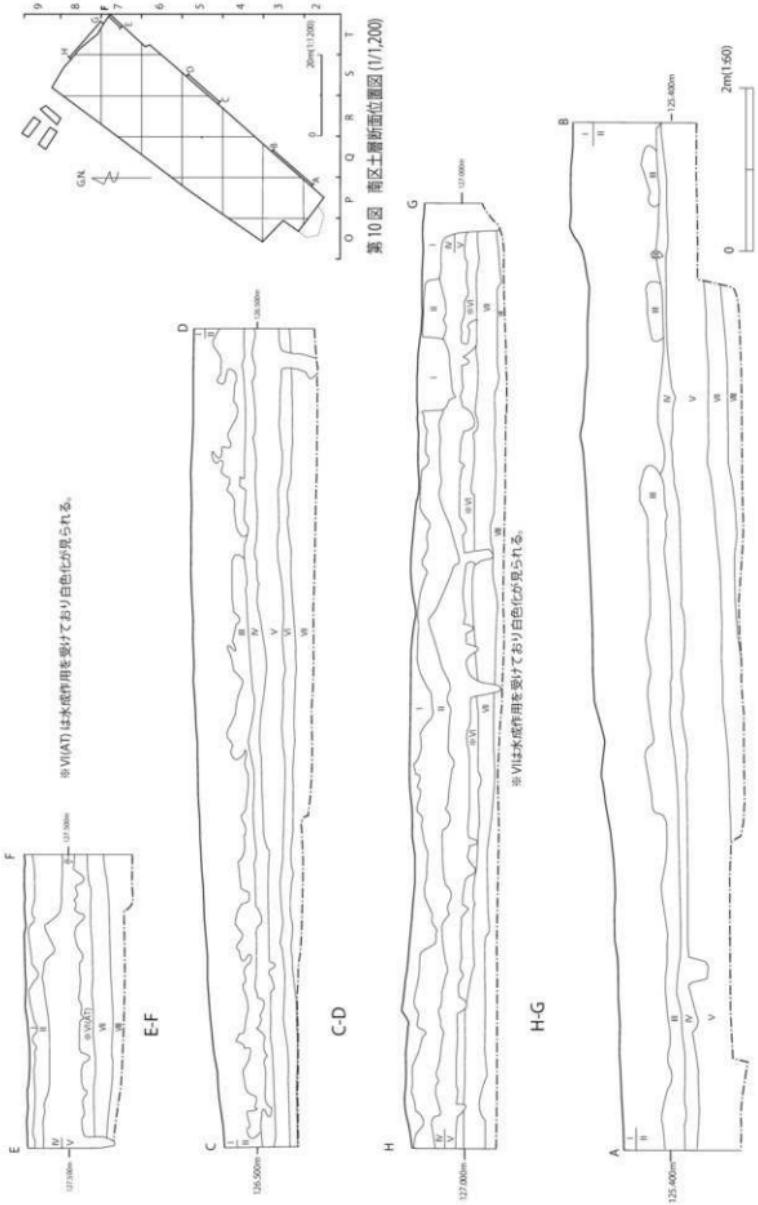
北区の南側では過密植栽の影響と思われる搅乱が表土から1.5m以上の深さまで堆積し、その下位では部分的に黒褐色ローム層と明褐色ローム層(AT)の堆積を確認できた。また、同区南西部も南区と同様に明褐色ローム層(AT)上に水成変成と思われる変色層が確認され、同層の堆積が確認できない所も見られた。さらに区内南東側の2m以下の深さでは赤褐色ローム層の堆積が確認できた(第13図)。

宮崎県埋蔵文化財センターでは東九州自動車道(都農～西都間)関連の埋蔵文化財発掘調査に際して、新富・高鍋町域の発掘調査の成果をもとに基本層序を作成し、遺跡間の共通理解を図ってきた。しかし、発掘調査の対象が北へ移動し川南町における発掘調査では既存の基本層序が対応しない事例も出てきた。そこで、川南町域で行われた発掘調査結果をもとに川南町域に対応した基本層序を作成した。

以下が東九州自動車道(都農～西都間)の土層と比較した本遺跡の基本的な土層堆積状況である(第1表)。

第1表 東九州自動車道(都農～西都間)基本層序【銀座第1遺跡(五次)、川南町域、新富・高鍋町域との比較】

銀座第1遺跡(五次)基本層序			川南基本層序			新富・高鍋基本層序		
No	略称	層名	No	略称	層名	略称	層名	年代
I		表土	1			表土	黑色土	
II	クロボク	黒色土	2	クロボク	鬼界アカホヤ	Kr-T h	高鍋スコリア	AD1235
III	K-Ah	鬼界アカホヤ	3	K-Ah	鬼界アカホヤ	K-Ah	鬼界アカホヤ	6.5ka
IV	MBO	黒褐色ローム	4	MBO	黒褐色ローム	MBO	黒褐色ローム	
V a	ML1	暗褐色ローム	5	ML1	暗褐色ローム	ML1	暗褐色ローム	
V b	Kr-Kb	小林鉱石を含む層	6	Sr-S	板岩繊維	Sr-S	板岩繊維	11ka
V c	MB1	暗褐色ローム	7	ML1	暗褐色ローム	ML1	暗褐色ローム	
VI	AT	明褐色ローム(始良T n.)	8	Kr-Kb	小林鉱石を含む層	Kr-Kb	小林鉱石を含む層	15ka
VII	MB2,3	暗褐色ローム	9	MB1	明褐色ローム	MB1	明褐色ローム	
			10	ML2		ML2	褐色ローム	
VIII	ML3	茶褐色ローム	11	AT		AT	始良Tn	24.5ka
			12	MB2		MB2	暗褐色ローム	
			13	MB3		A-T m	始良深層	26.5ka
						A-Ot	始良大榛	30ka
						MB3	明褐色ローム	
			14	ML3		ML3	褐色ローム	
			15	ML4	明褐色ローム	Kr-Aw	アワオシ	41ka
			16	Kr-hw		ML4	明褐色ローム	
			17		明黄色褐色ローム	Kr-hw	イワシコシ	50ka
			18		キンモチラローム		明黄褐色ローム	
			19	A-lw	始良青竹		キンモチローム	
			20	Aso-4	阿蘇4	A-lw	始良青竹	60ka
							阿蘇4	86-90ka



第9図 南区土層断面実測図(1/60)

A-B

第10図 南区土層断面位置図(1/1,200)

第3節 旧石器時代～縄文時代 早期の遺構と遺物

1 旧石器時代～縄文時代早期の概要

旧石器時代の層は基本層序のV層下部、縄文時代早期の層はIV層が相当する。南北両区共にⅢ層(K-Ah)を重機で剥いた後、各グリッド毎に設定した25%部分を掘り下げ、縄文時代早期から旧石器時代への調査を行った。また、25%設定域内で遺構・遺物が確認された場合は隣接するグリッドに調査範囲を拡大し、精査を行った。

(1) 南区の概要

南区では、第8図に示す範囲と深度まで調査を行った。これらの面で旧石器時代相当の自然流路跡を3条検出した。遺物は、剥片7点が出土した。縄文時代早期では、自然流路跡を1条、遺構として陥れ穴状遺構を3基、集石遺構を2基、土坑を4基を検出した。遺物は、剥片8点が出土した。

(2) 北区の概要

北区はVI層(AT)まで調査を行った。ここでは、旧石器時代相当の自然流路跡を2条検出した。遺物は、石鏃2点、ナイフ形石器4点、剥片1点が出土した。縄文時代早期の遺構は、陥れ穴状遺構を1基、土坑2基を検出した。以下、遺構と遺物について詳細を記す。

2 遺構と遺物

第I文化層の精査で自然流路跡を検出した。遺構ではないが、当時の周囲の環境を知る上で大変重要であり、この地域の旧地形として報告書に記載する。

(1) 自然流路跡(旧地形)

ア 旧石器時代

旧石器時代の自然流路跡を南北両区で検出した。南区の自然流路跡は、第12図b、c、dが該当する。

流路bは第11図Q4.5W/R4.5/R-S4.5Eの中央部よりやや左にある凹部でVa層よりやや黒みが強い部分を中心に存在したと考えられる。この凹部を中心に左右2m近くVI層(AT)が確認

できなかった。また、Vb層堆積が一定範囲に確認できた。これは流路跡の振幅に伴う浸食や水成堆積の影響と考えられる。

流路cは、第11図S6.5W/T6.5EやS5.5W/T5.5E中の浸食された凹部分に存在したと考えられる。S6.5W/T6.5Eでは凹部が複数確認されている。これらは、S5.5W/T5.5Eの凹部と比較すると深度は浅いが、その形状から水成浸食の影響と思われる。また流路の振幅範囲もVI層(AT)が確認できない部分が相当すると考えられる。

流路dは、第9図H-Gの中央部にある凹部とE-FのIV～V層から掘り込まれた凹部を結ぶ経路上に存在したと考えられる。E-FのVI層(AT)中には水成作用を受けたと思われる白色化が確認できた(第12図)。

北区の自然流路跡は、第14図e,fが該当する。

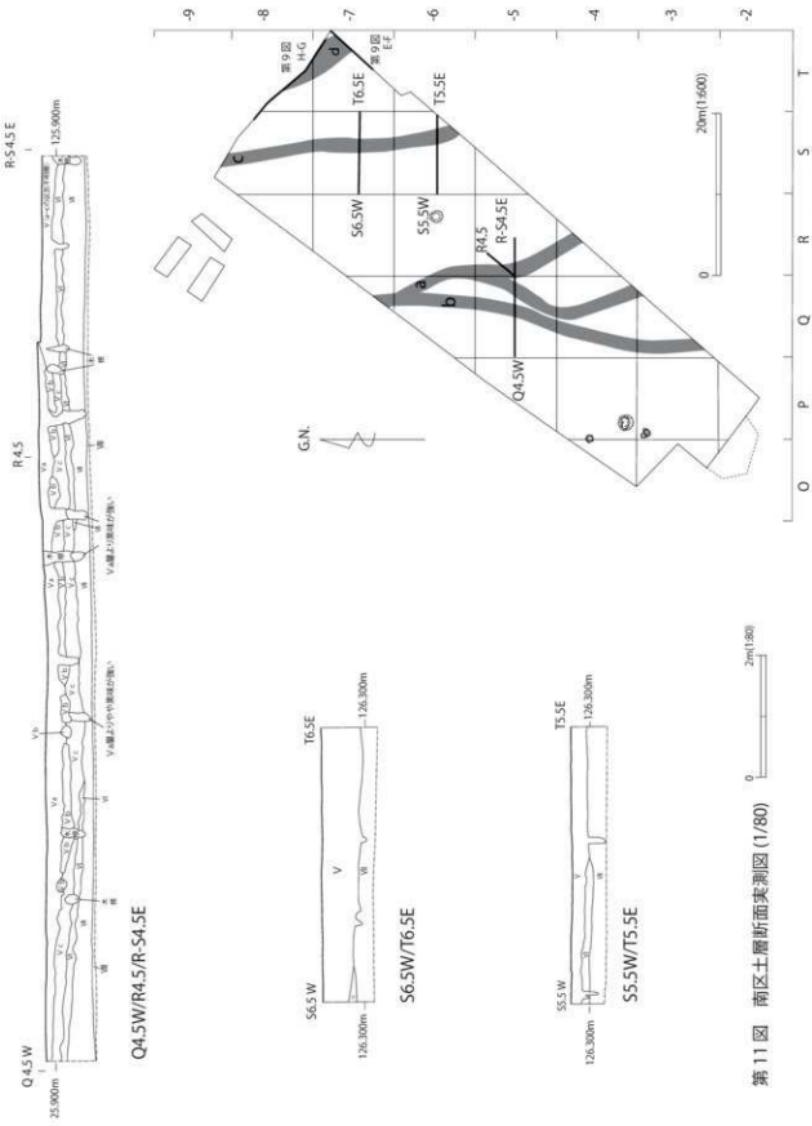
流路eは、第13図G-Hの中央部でV層から掘り込まれた凹部付近に存在したと考えられる。G-Hの中央から左にかけVI層(AT)が確認できない部分と水成と見られる変色域(第14図)とがほぼ重なることから、この範囲に振幅があったと思われる。また、位置的に南区の流路dに繋がると考えられる。

流路fは、第13図E-FのV層から掘り込まれた凹部とA-Bの凹部を結ぶ経路上に存在したと考えられる。途中のC-Dでは左部分でVI層(AT)が確認されておらずこの部分を流れていると思われる(第14図)。

イ 縄文時代早期

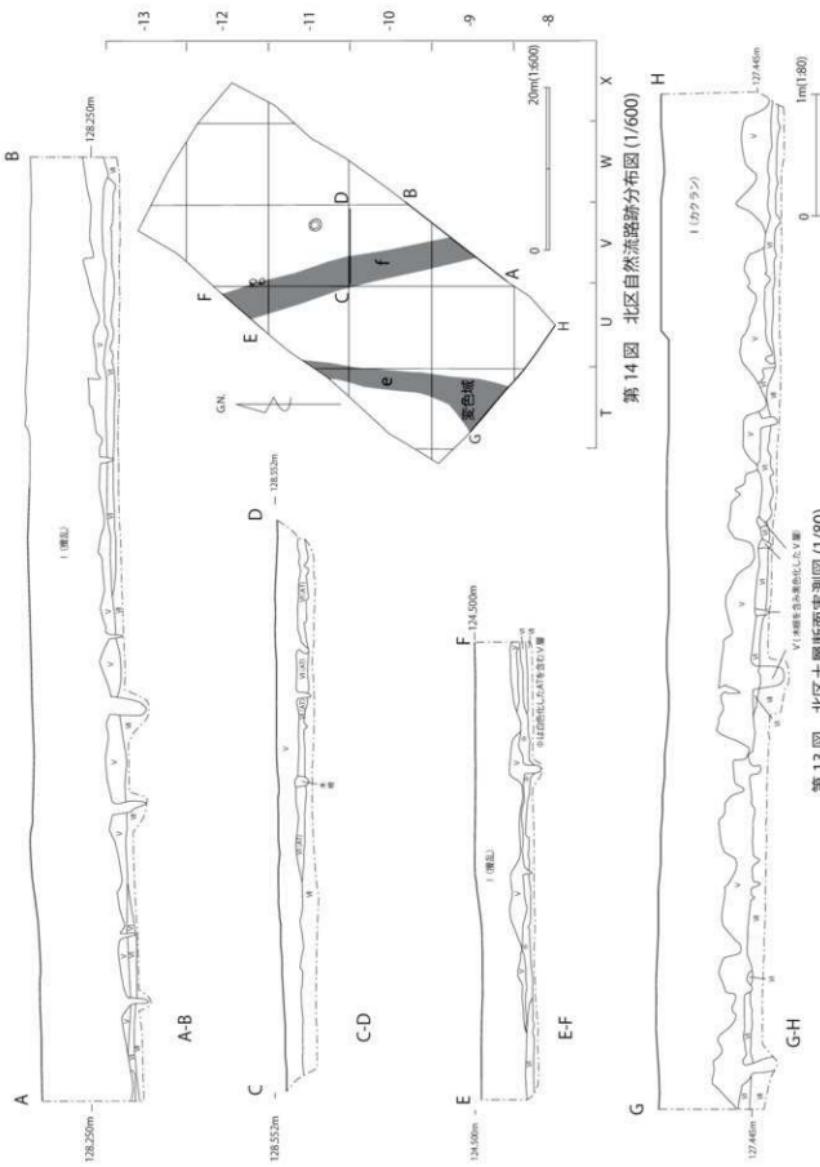
縄文時代早期の自然流路を南区で検出した。第12図で示すaが該当すると考える。第11図Q4.5W/R4.5/R-S4.5Eでは、R4.5を挟む形で凹部を形成しており凹部の中心線が鉛直より傾き、流路が蛇行した様子が伺える。また調査区内の南壁にも同様の凹部が見られ、凹部の底の部分にやや黒味が残ることからVa層より以前の流れと推測でき、縄文時代早期相当の自然流路跡であると考えられる。

第 12 图 南区自然流路分布图 (1/600)



第 11 图 南区土层断面实测图 (1/80)

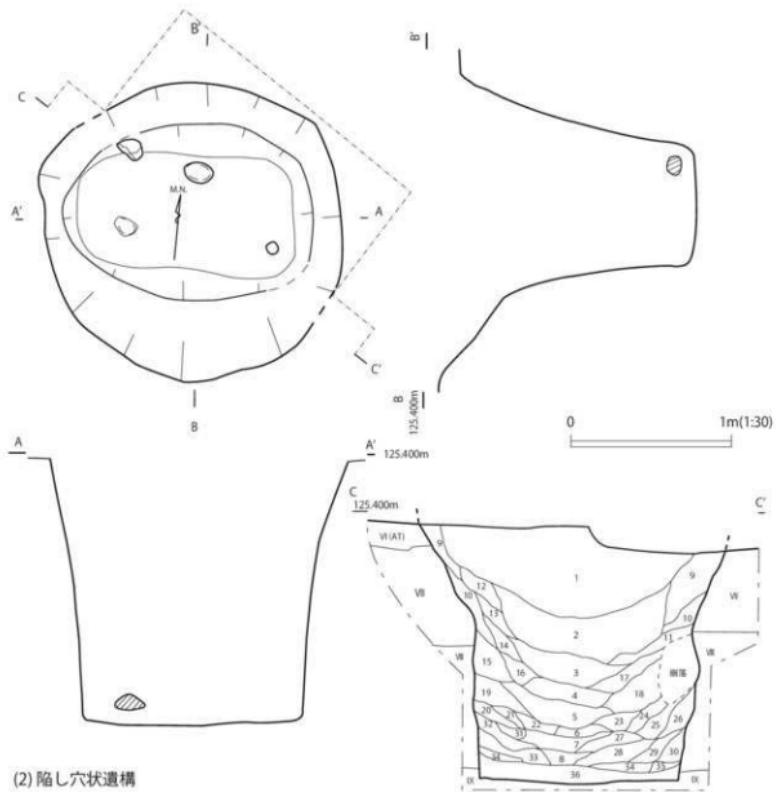




第14図 北区自然流路分布図(1/600)



第13図 北区土層断面実測図(1/80)



(2) 埋し穴状遺構

S102 (第7・15図)

長径 2.1m、短径 2.08m、残深 1.67m で円形を呈する。検出面はVI層(AT) 上面である。

遺構検出面上面からの埋土は、黒～黒褐色土を主体とし、VI層(AT) を多く含む埋土で、弱粘質で固くしまっている。中層(3-29層)は、黒褐色土を主体としVI層(AT) ブロックをやや多めに含む埋土で、粘性がやや強いがしまりはやや弱い。床面付近は粘性が強い明褐色～黒褐色土で、VII層(赤褐色ローム)を含みしまりはまちまちである。遺構の掘り込みはIX層(赤褐色砂質土)に達していた。また、尾鈴山酸性岩類疊(非被熱)を含め礫が3個出土している。

- 主標記
1. 地表21.00m(22.00m)、高さ 1m(以下)の砂質土層で多く当たる。しまりきついで堅い。粘性弱い。
 2. 1号土(テラクーラ)、高さ 30cm(以下)の砂質アクリルゴムで覆われて半分埋没。しまりきついで堅い。粘性弱い。
 3. 2号土(テラクーラ)、高さ 30cm(以下)の砂質アクリルゴムで覆われて半分埋没。しまりきついで堅い。粘性弱い。
 4. 3号土(テラクーラ)、高さ 30cm(以下)の砂質アクリルゴムで覆われて半分埋没。しまりきついで堅い。粘性弱い。
 5. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 6. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 7. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 8. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 9. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 10. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 11. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 12. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 13. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 14. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 15. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 16. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 17. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 18. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 19. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックをセメントで接着してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 20. 地表5.1.00m(22.00m)、しまりきついで堅い。粘性弱い。
 21. 地表5.1.00m(22.00m)、しまりきついで堅い。粘性弱い。
 22. 地表5.1.00m(22.00m)、しまりきついで堅い。粘性弱い。
 23. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 24. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 20-30cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 25. 地表5.1.00m(22.00m)、しまりきついで堅い。粘性弱い。
 26. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 27. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 28. 地表5.1.00m(22.00m)、しまりきついで堅い。粘性弱い。
 29. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 30. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 31. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 32. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 33. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 34. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 35. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。
 36. 地表5.1.00m(22.00m)、高さ 10-20cmの砂質ブロックを行き来してしまり。しまり中堅い。粘性弱い。

第15図 S102(埋し穴状遺構)実測図(1/30)

S103 (第7・16図)

長径 1.0m、短径 0.93m、残深 1.05m で不整円形を呈する。S102 と同様に検出面はVI層(AT) 上面で、この土層で穴の輪郭が明瞭に確認できた。

遺構上面から 1/2 程度は、黒～黒褐色土を主体とし VI 層(AT) 粒子をわずかに含む埋土で、しまりがきわめて強い。さらに床面に近づくと、黒～暗褐色土を主体に VII 層(暗褐色ローム) ブロックをごくわずかに含む埋土で、粘性がやや弱く、しまりもやや弱い。床面付近は VIII 層(赤褐色ローム) を主体に IV 層(黒褐色土) が混在する埋土で、粘性は強いが、しまりはやや弱い。

遺構の掘り方は、VII 層(赤褐色ローム) に達していた。

底部から AT 層までの深さは約 0.8m である。床面には直径 8cm 程度の小穴が 3 箇所あり、杭の痕跡と考えられる。床面からの深さは 0.22m であった。

S104(陥し穴状遺構)

S108(土坑)(第7・17図)

VI 層(AT) 上面において S104 と S108 が切り合った状態で検出した。半截の後、土層断面を確認した結果 S108 は VII 層を主体とし、粘性は弱くしまりのある暗褐色土を埋土とした土坑であることが分かった。また S104 は長径 1.1m、短径 0.8m、残深 0.93m で途中から円形を呈する陥し穴状遺構であることが確認できた。また、S108 と S104 の切り合い関係では、S108 が S104 を切っている。

S104 は遺構上面から 1/2 程度は黒褐色土を主体として VI 層(AT) 由来の粒子をわずかに含む埋土で、粘性はやや弱いが非常に固くしまっている。中層(4-8 層) は黒～黒褐色土を主体として VI 層(AT) 由来の粒子をわずかに含む埋土である。床面は、VII 層(赤褐色ローム) に達し、粘性の強い明褐色土に覆われていた。また、床面には直径 3cm の小穴が開いており、穴の中心に傾斜が見られた。床面からの深さは 20cm であった。また、床面付近から剥片が出土した(第 18 図 1)。これは、流紋岩を用いることから後期旧石器時代の所産である可能性を指摘できるが、遺構の帰属年代を示すものとは断定できない。

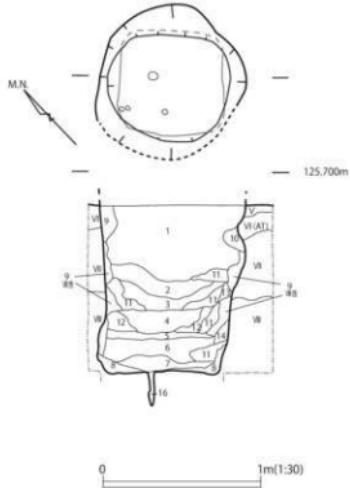
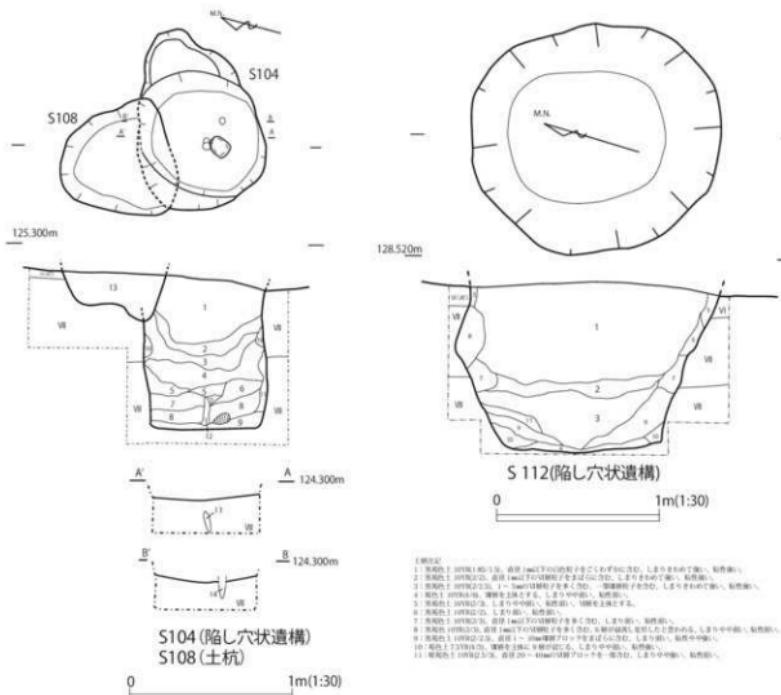


図16実測図
 1. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 2. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 3. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまり 20～30cm のブロックを多く含む土など。
 4. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 5. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまり 20～30cm のブロックを多く含む土など。
 6. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 7. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 8. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 9. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、V 茶褐色土、しまりの中程度。
 10. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 11. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 12. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 13. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 14. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 15. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。
 16. 土坑から 1.0m(100cm) 下で、直径 30cm(75cm) の白い粒子を多く含む、しまりの強い土。

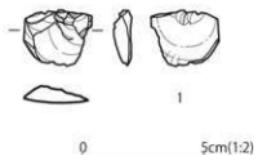
第16図 S103(陥し穴状遺構)実測図(1/30)

S112 (第6・17図)

長径 1.5m、短径 1.4m、残深 1.05m で不整円形を呈する。検出面は VI 層(AT) 上面で、ほぼ円形に近いプランが確認できた。遺構埋土の上層(1 層) から中層(2-3 層) にかけては黒褐色土を主体とし白色粒子をわずかに含み、しまりがきわめて強い。中層(2-3 層) は、黒～暗褐色土に VI 層(AT) 粒子を多く、VII(茶褐色ローム) 粒子をごくわずかに含む埋土で、粘性は弱くしまりが弱いものが多くなる。床面付近は黒～暗褐色 VII 層(茶褐色ローム) を主体に VI 層(AT) ブロックを一部に含む埋土で、粘性は弱くしまりは強い。遺構は、VII 層(茶褐色ローム) まで掘り込まれていた。



第17図 S104(陥し穴状遺構) S108(土坑)・S112(陥し穴状遺構)実測図(1/30)



第18図 S104 出土石器実測図(1/2)

(3) 集石遺構

S260 (第7・19図)

南区P4グリッドNWに位置し、検出面はVI層(AT)上位のV層下面である。長径1.55m、短径0.7mの範囲に5点で、礫石材はすべて尾鉢山酸性岩類礫である。これらには顯著な赤化は見られなかった。配石したと思われるが、礫の接合関係はない。

S261 (第7・19図)

南区Q5グリッドNWに位置し、Ⅲ層(K-Ah)上面で検出した。長径0.9m、短径0.3mの範囲に2点で、石材はいずれも尾鉢山酸性岩類礫である。これらにはごく弱い赤化が見られた。掘り込みはなかったが差し込まれるように検出された。礫の接合関係はない。

(4) 土坑

S105 (第7・20図)

南区O3グリッドNEに位置し、長径0.84m、短径0.5mで不定形を呈する。VI層(AT)上面で

検出した。埋土は黒褐色土できわめて固く白色粒子をわずかに含んでいた。礫や遺物は出土しなかった。

S106 (第7・20図)

南区O4グリッドSEに位置し、長径0.54m、短径0.45mで楕円形を呈する。VI層(AT)で検出した。埋土は、上層が黒褐色土で白色粒子を含みきわめて固い。中層から下層にかけて次第に固さが弱くなる。礫や遺物は出土しなかった。

S107 (第7・20図)

南区の南部調査区外O2グリッドNEに位置し、長径0.97m、短径0.47mで楕円形を呈し、床面にピット状の掘り込みをもつ。VI層(AT)上面で検出し、埋土は黒褐色でVI層(AT)またはVb層(Kr-Kb)由来の白色粒子を多く含みきわめて固い。底面には、粘性の弱い黒色土がある。礫や遺物は出土しなかった。

S109 (第7・20図)

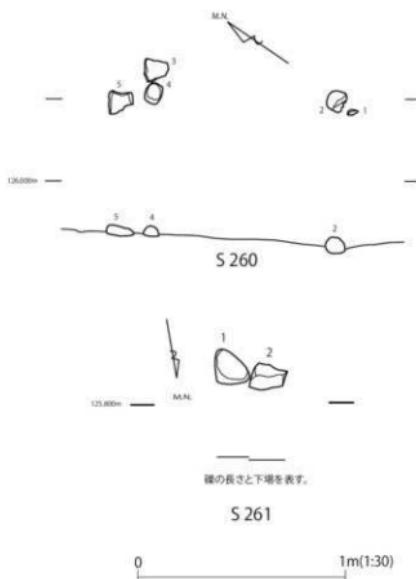
南区R6グリッドNEに位置し、長径1.03mの不定形を呈する。VI層(AT)上面で検出した。埋土は黒褐色で白色粒子を含みきわめて固い。底面は白色粒子の密度が低く、黒褐色よりわずかに黒い色調が見られる。礫や遺物は出土しなかった。

S110 (第6・20図)

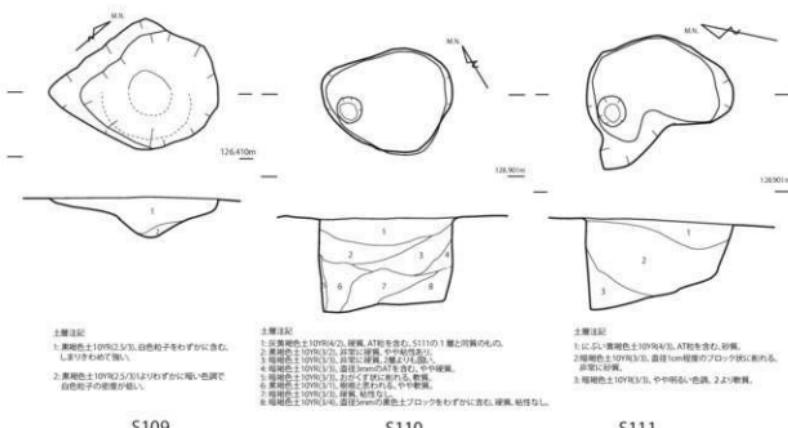
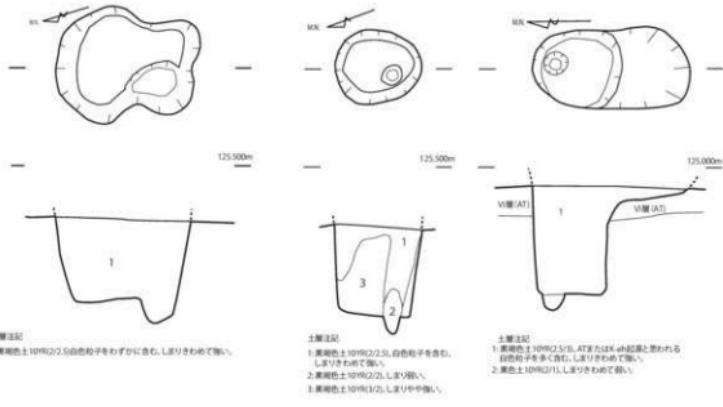
北区V12グリッドSWに位置し、長径が0.8m、短径が0.64mの楕円形を呈する。VI層(AT)で検出した。埋土は上層が灰黄褐色土でVI層(AT)粒を含み硬質である。中層は一部硬質だが大部分は暗褐色土で軟質でオガクズ状に削れる。下層は暗褐色土で硬質である。礫や遺物は出土しなかった。

S111 (第6・20図)

北区V12グリッドSWに位置し、長径が0.8mの不定形を呈する。VI層(AT)上面で検出した。埋土は上層がS110と同じ灰黄褐色土で硬質である。中層は暗褐色できわめて固い。下層は、中層よりやや明るい色調の暗褐色土でやや固い。礫や遺物は確認できなかった。



第19図 集石遺構実測図(1/30)



第20図 土坑実測図(1/30)

0 1m(1:30)

3 遺物

(1) 南区出土石器(第21・22図)

2・3はチャート製の打製石鏃である。2は上半部、3は先端・下半部を欠損するが、いずれも凹基鏃であろう。4はホルンフェルス製の不定形剥片である。背面に礫面を残す。5はホルンフェルス製の幅広剥片である。打撃時の衝撃により、剥離軸に沿って折損している。6は珪質頁岩製の剥片である。末端部のみ残存する。7は珪質頁岩製の剥片である。背面末端に打面転位以前の作業面を残す。8は頁岩製の打製石斧と考えられ、9の剥片が接合する。背面には礫面を大きく残し、縁辺にはやや細かな二次加工痕が観察される。石質がやや粗質であり、石核の可能性は低いため、打製石斧と判断した。10は珪質頁岩製の縦長剥片である。11は良質の珪質頁岩を用いた剥片である。背面の剥離面構成から本来は石刃に類する縦長剥片であった可能性が高い。12はホルンフェルス製の不定形剥片である。13・14は尾鈴山酸性岩類製の不定形剥片である。

15は尾鈴山酸性岩類製の縦長剥片である。16・17・18・19は尾鈴山酸性岩類製の不定形剥片である。20は尾鈴山酸性岩類製の搬入礫である。目立った加工・使用痕は認められないが、遺跡内に意図的に持ち込まれた可能性が高い。

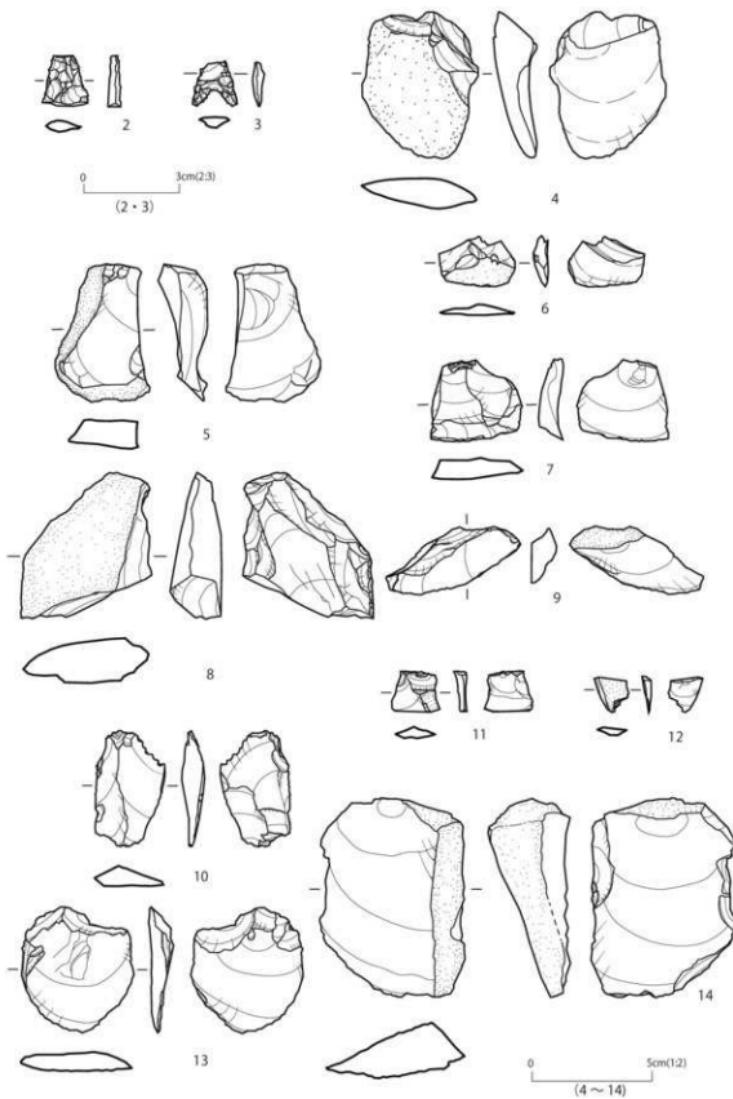
(2) 北区出土石器(第23図)

21はチャート製の打製石鏃である。片方の脚部を欠損するが、いずれも凹基鏃であろう。22も凹基鏃であるが、風化の激しいホルンフェルスを用い、剥離面の判読は困難である。23はいわゆる狸谷型ナイフ形石器であり、良質の珪質頁岩を用いる。24はいわゆる今岬型ないし北牛牧型ナイフ形石器の範疇に含まれるもので、流紋岩製の逆「ノ」の字状剥片を素材とし、やや平坦な剥離で基部を作出する。先端を欠損する。25は良質の黒曜石製(いわゆる霧島産)を用いた角錐状石器である。先端・基部を欠損する。背面に礫面を多く残した横長剥片を素材とする。26は良質のチャート製の縦長剥片を素材とし器体下半部側縁部にやや不規則な二次加工を施す。

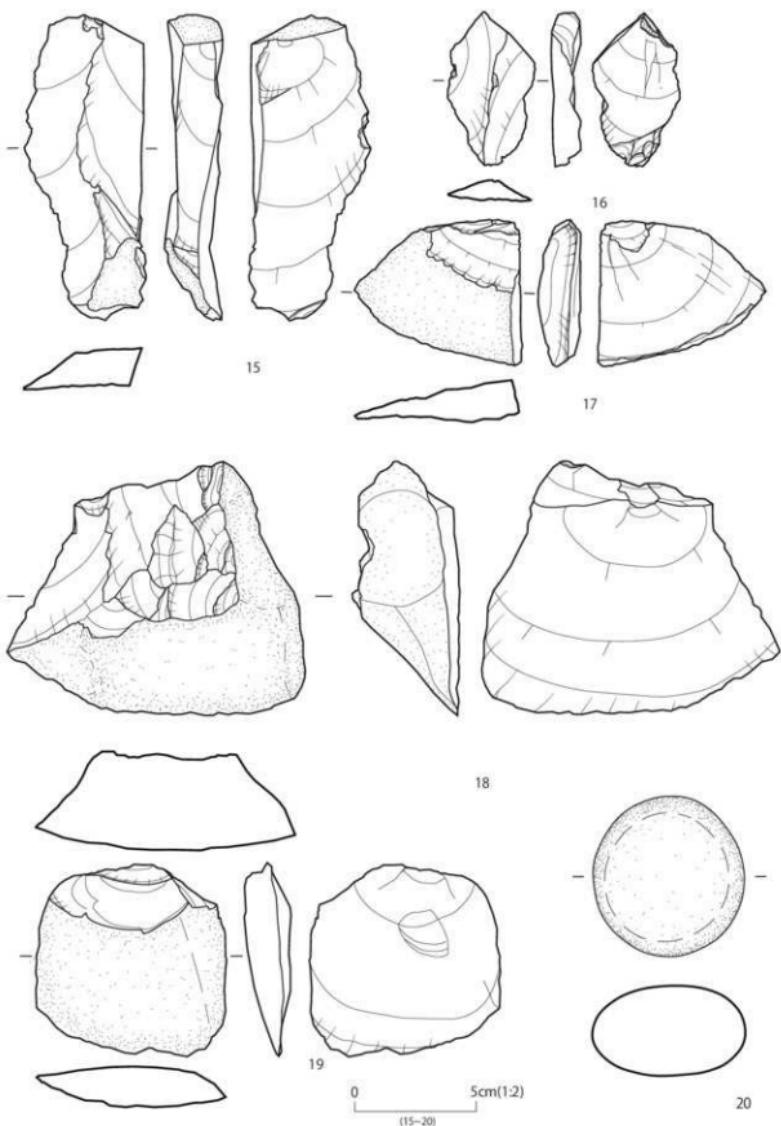
背面左側縁は背面側へ、右側縁は腹面側に向けた錯向剥離が観察される。腹面への加工はやや平坦な剥離でバルブの厚みを減じるようになされている。先端部にはいわゆる衝撃剥離痕が観察されるが、後にその縁辺に不規則な剥離痕が重なる点が特筆される。27はホルンフェルス製の縦長剥片である。28はチャートないし珪質頁岩製の不定形剥片である。

(3) 事前調査時出土石器(第24図)

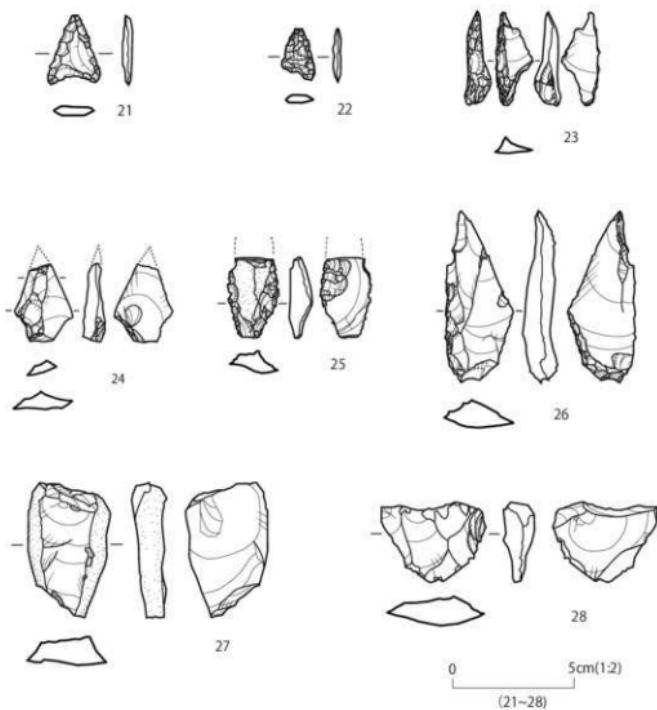
29は良質の黒曜石を用いた細石刃である。頭部・尾部を折断して除去したものと推定される。30・31はチャート製の打製石鏃である。30は先端部のみ残存し全体形は不明である。31は凹基鏃であるが脚部が菱形に尖る点が注目される。32は良質の珪質頁岩製の縦長剥片である。やや短寸ながら同規格の剥片を生産しようとしたことが背面構成から読み取れる。33はホルンフェルス製の石核である。34はホルンフェルス製の削器である。背面が礫面で構成される横長剥片を素材とする。35は尾鈴山酸性岩類製の縦長剥片である。36はホルンフェルス製の石核である。風化が著しく剥離面の厳密な読み取りは困難である。37は流紋岩あるいは凝灰岩を用いたナイフ形石器である。ほぼ一側縁であるが基部は半うじて二側縁加工を施す。石刃を素材とする。38はホルンフェルス製の二次加工剥片である。バルブ付近に不規則な微細剥離痕を残す。39は姫島産黒曜石あるいは姫島産ガラス質安山岩を用いた三角形(平基)打製石鏃である。薄い剥離で丁寧に仕上げられている。40はチャート製の二次加工剥片である。背面右側縁にやや不規則ではあるがスクレイバーエッヂ状の二次加工痕が認められる。



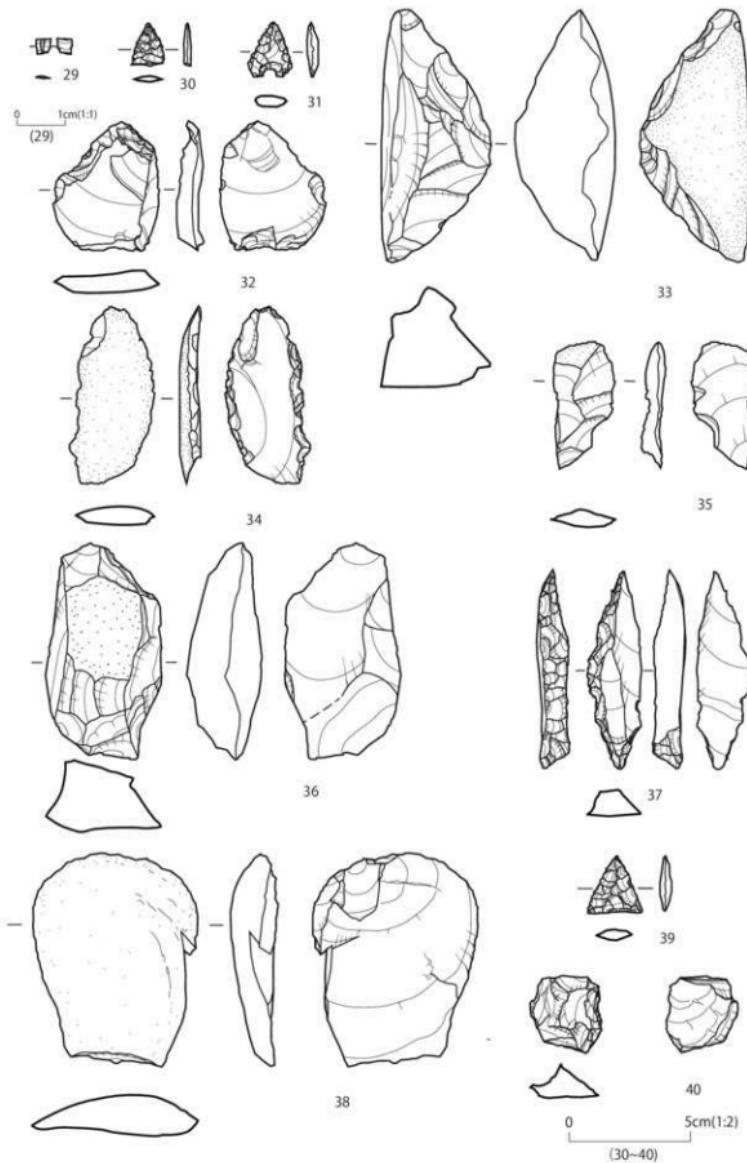
第21図 南区旧石器時代～縄文時代早期出土石器実測図 (縮尺は各スケールに表示)



第22図 南区縄文時代早期出土石器実測図(1/2)



第23図 北区旧石器時代～縄文時代早期出土石器実測図(1/2)



第24図 事前調査旧石器時代～縄文時代早期出土石器実測図

第2表 石器計測表

番号	留置	調査区	注記	層	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	剥片	南区	S 10.4オトシ六	2~4	流紋岩	2.20	2.80	0.70	2.30	
2	打製石器	南区	Q65W	I	チャート	1.60	1.40	0.40	0.90	トレンチャー擾乱より出土
3	打製石器	南区	Q66E	II	チャート	1.40	1.40	0.40	0.50	U字
4	剥片	南区	58	V	ホルンフェルス	6.10	4.80	1.80	40.90	
5	剥片	南区	552	IV	ホルンフェルス	5.75	3.90	2.10	31.80	
6	剥片	南区	292	VI	珪質頁岩	2.10	3.10	0.60	2.70	
7	剥片	南区	204	V c	珪質頁岩	3.40	3.80	1.00	12.90	
8	打製石斧	南区	195	V	頁岩	6.10	5.40	2.10	64.40	8と9は接合する
9	剥片	南区	453	V	頁岩	2.80	5.60	1.10	12.90	
10	剥片	南区	OSNE/RSNW	I	珪質頁岩	5.00	3.00	0.90	11.30	擾乱
11	剥片	南区	555	IV	珪質頁岩	1.70	2.00	0.60	1.40	
12	剥片	南区	551 IV	IV	ホルンフェルス	1.50	1.40	0.40	0.60	
13	剥片	南区	308	V a~V b	尾鷲山酸性岩類	5.20	4.50	1.00	21.00	
14	剥片	南区	53	V	尾鷲山酸性岩類	8.30	6.10	3.40	126.80	
15	剥片	南区	2	IV下~V上	尾鷲山酸性岩類	12.50	5.00	2.30	131.00	
16	剥片	南区	12	IV	尾鷲山酸性岩類	6.30	3.60	1.20	23.00	
17	剥片	南区	14	IV	尾鷲山酸性岩類	6.00	6.90	1.75	59.00	
18	剥片	南区	15	IV'	尾鷲山酸性岩類	10.40	12.20	4.40	495.90	
19	剥片	南区	74	IV'	尾鷲山酸性岩類	7.90	7.90	1.90	109.90	
20	縫	南区	40	IV	尾鷲山酸性岩類	6.40	6.10	3.60	204.50	P40 ピットより推出
21	打製石器	北区	603	V	チャート	2.10	1.60	0.30	0.80	
22	打製石器	北区	662	V	ホルンフェルス	1.55	1.00	0.25	0.40	
23	ナイフ形石器	北区	664	V下VI上	珪質頁岩	3.85	1.52	1.23	3.50	
24	ナイフ形石器	北区	661	V	流紋岩	3.45	2.69	0.75	5.70	今崎型 or 北牛牧型ナイフ形石器
25	角錐状石器	北区	665	V下VI上	黑曜石	3.30	2.07	0.95	5.40	南九州系?
26	ナイフ形石器	北区	キタ区	V下VI上	チャート	7.00	2.80	1.40	19.00	
27	剥片	北区	#キタ区V~NW	V下	ホルンフェルス	5.50	3.40	1.40	24.50	W2 グリッド~ NW
28	剥片	北区	V北V~NW		チャート or 硅質頁岩	3.30	4.30	1.30	14.70	トレンチャー擾乱より出土
29	縫石刃	事前 A 区	AE Tr	V	黑曜石	0.61	0.60	0.10	0.05	東トレンチ、南九州系黒曜石
30	打製石器	事前 B 区	BW Tr	IV	チャート	1.30	1.00	0.20	0.20	西トレンチ
31	打製石器	事前 B 区	BW Tr	IV	チャート	1.70	1.40	0.35	0.70	西トレンチ
32	剥片	事前 A 区	AAT2	V	珪質頁岩	5.30	4.40	1.10	25.50	Aトレンチ
33	石核	事前 B 区	ニン BW Tr	IV上	ホルンフェルス	10.30	4.50	4.10	166.20	西トレンチ
34	剥片	事前 B 級強	B級強	IV	ホルンフェルス	7.30	3.50	0.85	23.90	
35	剥片	事前 B 区	B中 Tr IV	IV	尾鷲山酸性岩類	5.20	2.55	0.70	8.40	中トレンチ
36	石核	事前 B 級強	B級強		ホルンフェルス	8.90	4.75	3.00	138.80	
37	ナイフ形石器	事前 B 区	BETr V	V	凝灰岩 or 流紋岩	8.06	2.20	1.40	15.20	東3トレンチ
38	剥片	事前 C 級強	C級強		ホルンフェルス	8.75	6.80	1.90	115.80	
39	打製石器	事前 D 区	DETn N M80	IV	黑曜石 or 安山岩	1.80	1.70	0.35	0.80	東トレンチ。道島産黒曜石 or ガラス質安山岩
40	石核	事前北区	#キタ区V~NW	IV	チャート	3.50	2.80	1.90	12.70	2トレンチ

第4節 弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

1 弥生時代～古墳時代の概要

弥生時代～古墳時代の包含層は五次調査基本層序におけるⅡ層下部Ⅲ層(K-Ah)上部が相当する。南区では事前調査の結果、Ⅲ層(K-Ah)上面で竪穴建物跡が確認され、弥生時代の集落が予測された。調査は、まず重機を用いて表土を剥ぎ、その後事前調査トレンチを再発掘し、竪穴建物跡の位置を確認した。さらに新たにトレンチを開けながらⅢ層(k-Ah)上面まで精査した。南区では、時代相当の遺構として竪穴建物跡を4軒検出した。

以下これらの遺構と出土遺物について記述する。

2 遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

S1・S51

ア 遺構(第5・25図)

S1は南区の中央よりやや西側に位置し、ほぼ隅丸方形を呈する。長軸5.4m、短軸4.88mと大型で長軸はN65°Eを指す。検出面から床面までの深さは最深部が0.40mを測る。床面では建物跡に伴う柱穴は確認できなかった。また、S1をS51が切っており、S51が新しい遺構である。

S51はS1を拡張することでその一部が検出された。全体像が不明瞭なため軸の長さは不明である。

イ 遺物(第26～33図、第3～4表)

S1はトレンチャーの影響を強く受けしており、遺物のほとんどは遺構床面よりも上位で甕・壺・鉢・高環・装飾高環・軽石・磨石・台石が出土した。S51の遺物としては石錘が出土している。

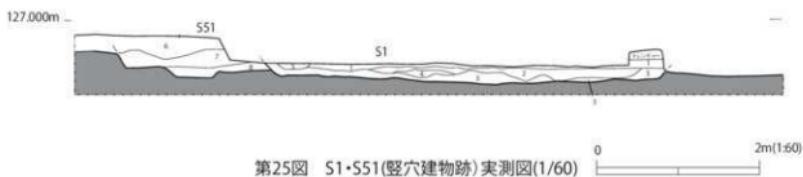
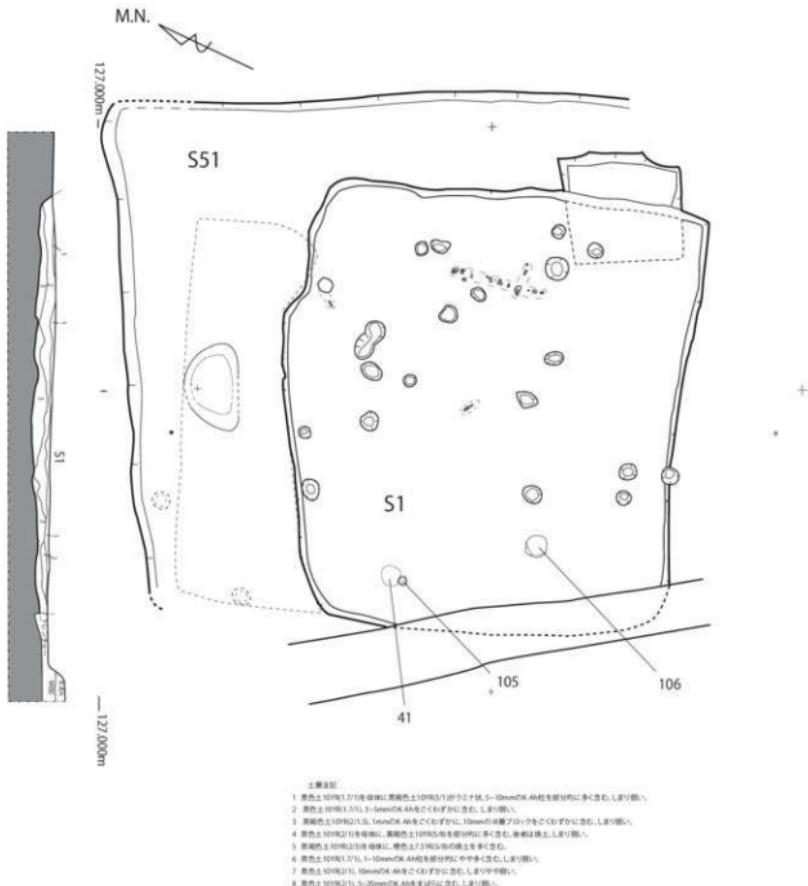
甕(第26図41～60、第3表)

41～60は甕である。41～43・54はいずれも「く」の字状に外反する頸部をもつ。41は完形で出土している。42は外面全体にススが付着している。底部は黒斑が認められ、平底である。43～47は甕の口縁部～胴部である。43は外面にススが付着している。46の口唇部に指頭痕が47の口唇部に横ナデが見られる。48～53は胴部～底部で、51は脚台を有する。48は内面底部には黒斑が、外面にはススの付着が見られる。49は外面上に工具ナデ・指ナデが施されている。50は底部に指押さえが見られ、若干外に張り出している。51は底部が上底で、大きく外に張り出している。52は外面にススが付着し底部には指押さえ痕がある。53は外面に黒斑を認める。底部が上底であり、若干の張り出しが見られる。54～56は口縁部・口縁部～胴部である。54は外部面にススが付着している。55の口唇部にはナデや指押さえの跡があり、外面全体にススが付着している。56は外面全体にススが付着している。内面頸部に指押さえの跡がある。57～60は底部である。57は平底であり内面に強い指ナデを認める。58は平底であり外面に黒斑を認める。59の外面胴部にはススが付着している。底部は上底であり指ナデが施され、張り出しも見られる。60は外面と底面にススが付着し、平底である。

壺(第27・28・29図61～85、第3～4表)

壺は完形での出土は無かったが、口縁部の形状や模様など様々特徴が見られた。

61は同一個体であり平底をもつ。62は工具によりナデが施された複合口縁をもち、頸部に刻み目突帯が施されている。胴部外面では風化が進んでいる。63は同一個体である。口縁部外面から胴部にかけてススの付着があり一部に黒



第25図 S51・S551(竪穴建物跡)実測図(1/60)

斑を認める。底部は上底であり、やや張り出しが見られる。64 は口縁部～胴部までほぼ完形で出土している。複合口縁であり、口縁部外面には工具による斜方向のナデを認める。全体的に調整が粗く粘土つなぎのたまりやへこみが隨所に見られる。65 は同一個体である。口縁部には横ナデが施される。底部は平底である。66 は底部が脚台状になっている。67 は同一個体である。胴部外面と底部に黒変がある。頸部内面に深めの指頭痕がある。外面にススが付着している。底部は平底である。68 の底部は平底だが、底面中央部は凹状でナデが施されている。また外面全体にススの付着が見られる。69 は同一個体である。口唇部には横ナデがあり、その上から櫛描波状文が施されている。外面頸部付近には 2 段櫛描波状文が施されている。底部は上底である。70 は口縁部～胴部である。外面に工具によるナデが見られるが、風化が激しく単位が不明である。71 は口縁部である。口唇部に横ナデが、外面に縦方向のミガキが施されている。72 は口縁部内径 5cm のやや小型の壺である。外面全体に縦方向のミガキが施されている。底面の中心は指つまみの痕跡がみられる。73 は頸部内面に指頭痕が見られる。74 は口唇部に横ナデが施されている。なお図化されていないが、頸部から肩部にかけて線刻の割り付けが見られる。75 は口唇部に横方向の工具ナデが見られる。外面胴部に風化が見られる。76 ～ 78 は口縁である。76 は口唇部にナデが見られる。77 の外面には横ナデが施されている。傾きは不明である。78 は複合口縁をもつ。風化が激しく調整は不明である。79 ～ 81 は頸部～胴部である。79 は同一個体である。外面頸部にはハケ目の上から櫛描波状文が施されている。80 は胴部下部にススの付着が見られる。内部には指押さえ・指ナデ・

ハケ目が見られる。81 の内部胴部には指ナデ・指頭痕がある。82 は胴部である。胴部に推定最大径 19.2cm をもつ。83 はやや長めの頸を持ち、口縁は若干外反している。口唇部に横ナデが施されている。84 ～ 85 は底部であり平底である。
鉢(第 29 図 86 ～ 91、第 4 表)

86 は完形で出土している。口唇部に指押さえやナデが施されている。底面は上底で粗い指ナデが見られる。88 は底部が上底であり、若干外に張り出しが見られる。89 ～ 91 は口縁部～胴部である。89 の口唇部には横ナデが施されている。90 は外面にススが付着している。内面には指押さえや指ナデが見られる。91 は口縁上部に横ナデが見られる。

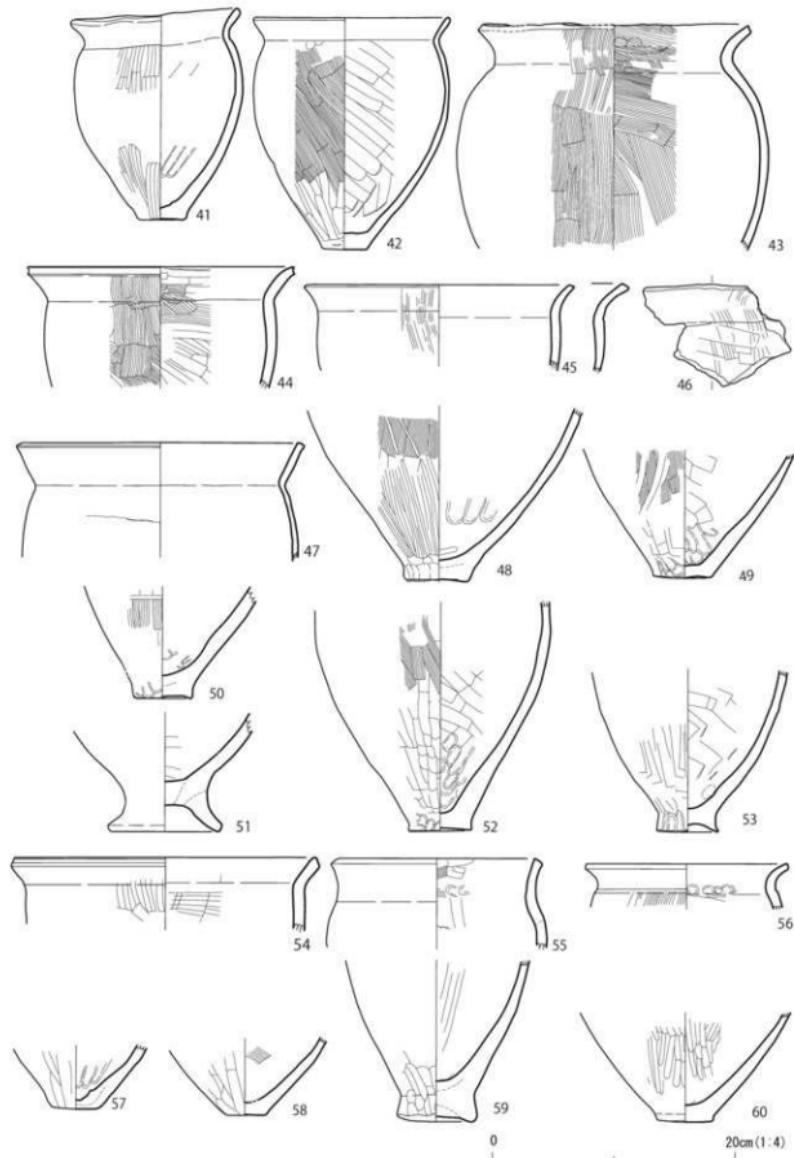
小型土器(第 29 図 92、第 4 表)

92 はほぼ完形で出土した。推定口径 3.7cm、器高 5.05cm である。口縁部外面と胴部には部分的に櫛描波状文が施されている。

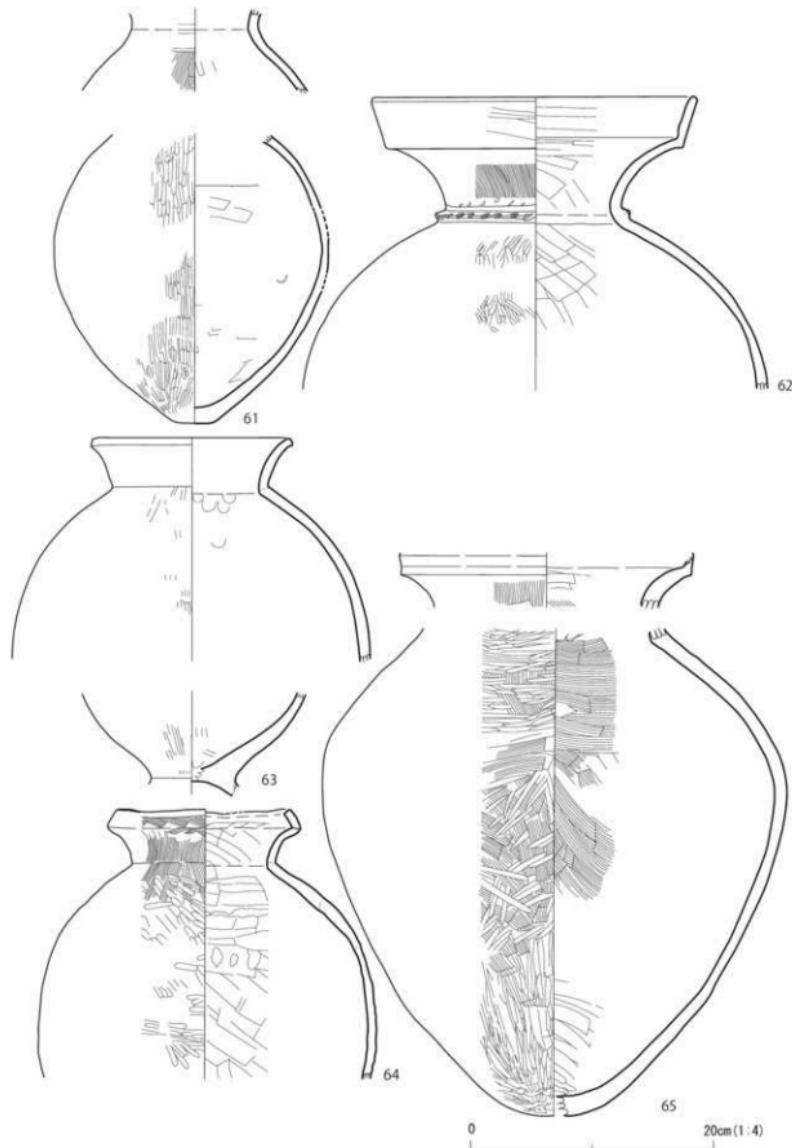
器種不明土器(第 29 図 93、第 4 表)

93 は外面が明赤褐色、内面が赤褐色である。外面には工具による 3 列の連続刺突文が 2 段に施されている。底部には縦位の連続刻み目を認める。
高坏(第 29・30 図 94 ～ 103、第 4 表)

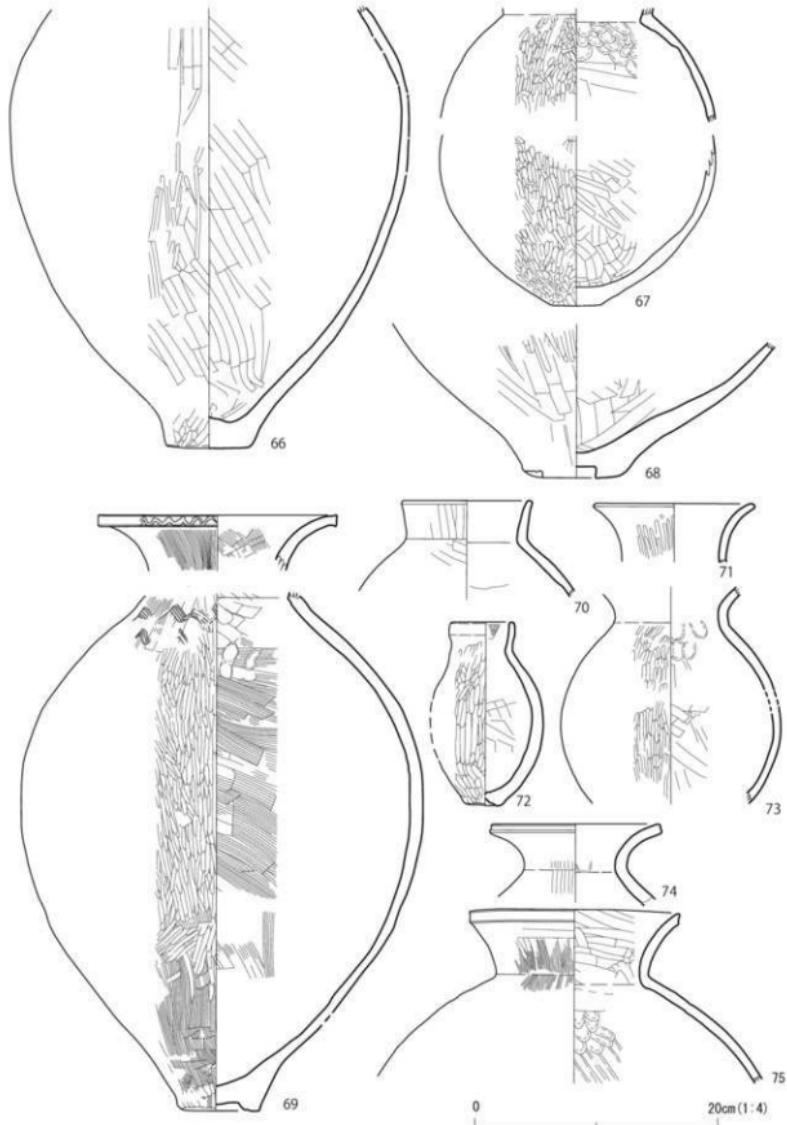
94 ～ 98 は坏部であり、95・96・97 はいずれも口縁部が屈曲後、やや外反しながら立ち上がる。口唇部には横ナデが施される。弥生時代後期の高坏である。99 ～ 100 は脚部である。99 は同一個体であり下部には円形四方透し、上部にも透かしを認める。100 は脚柱部分を残す。101 ～ 102 は脚部～裾部である。101 は円形三方透しをもつ。102 は円形四方透しの高坏である。103 は高坏の裾部である。裾は底部から外反して立ち上がり、「く」の字に曲がりながら脚部へと続く。曲がった部分には波状の突帯がある。また裾部には穿孔が数箇所開き、二叉状工



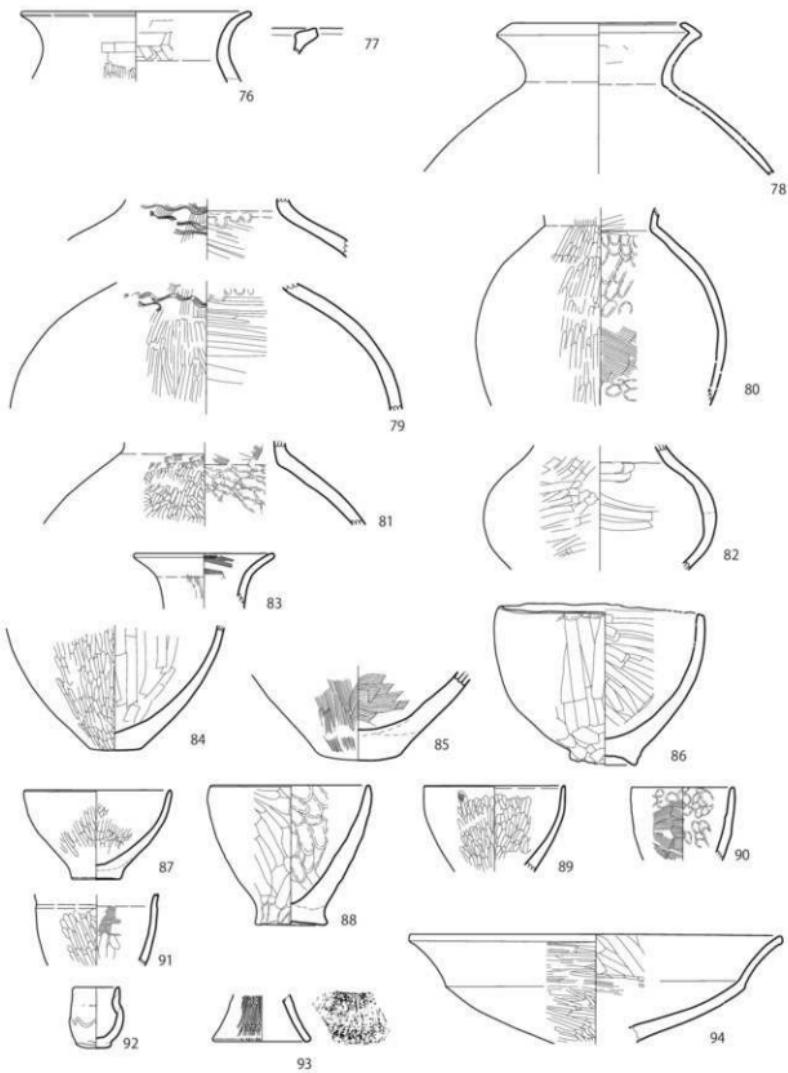
第 26 図 S 1 出土土器実測図①(1/4)



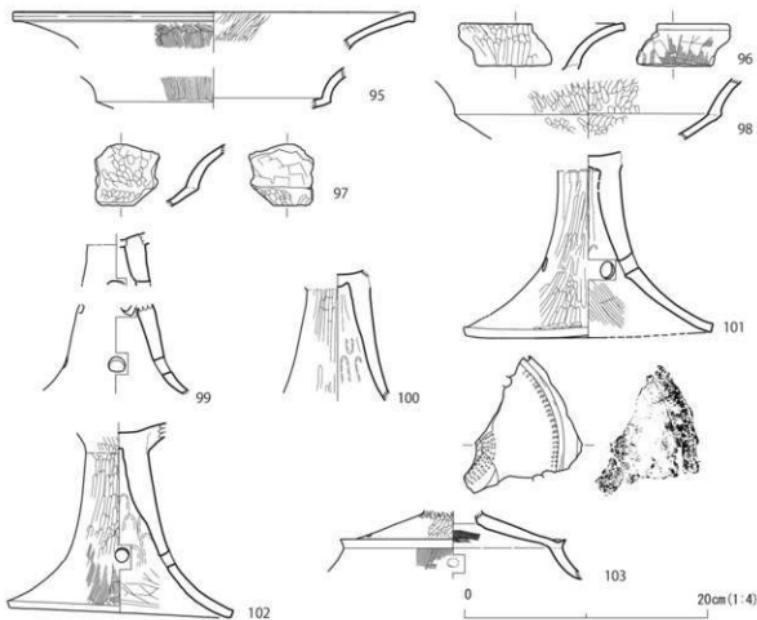
第27図 S1出土土器実測図②(1/4)



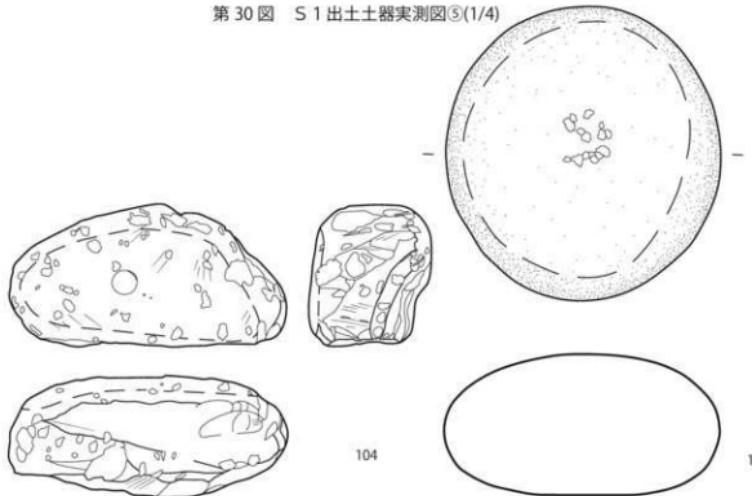
第28図 S1出土土器実測図③(1/4)



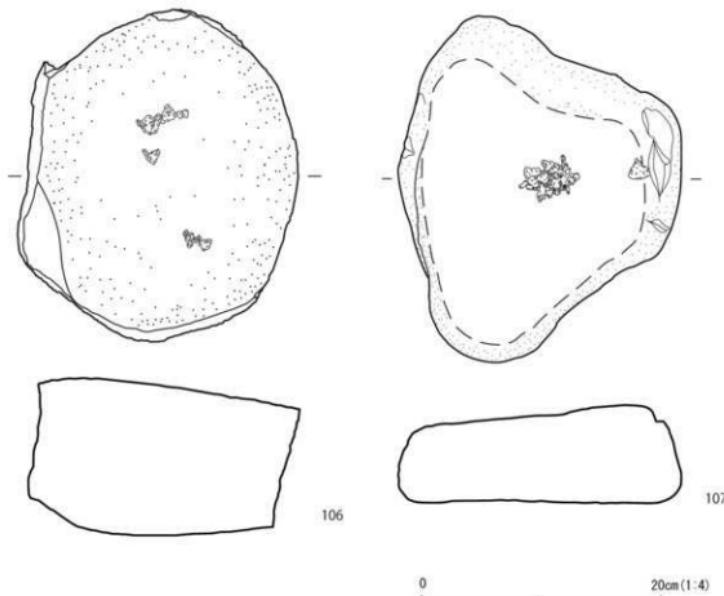
第29図 S1出土土器実測図④(1/4)



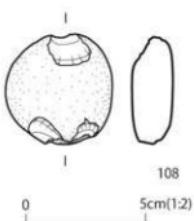
第30図 S1出土土器実測図⑤(1/4)



第31図 S1出土石器実測図①(1/2)



第32図 S1出土石器実測図②(1/4)



第33図 S51出土石器実測図(1/2)

具によると見られる連続刺突文が施される。その形状から祭祀用に装饰された高环と思われる。石器(第31～33図、第5表)

104は軽石である。一面水平に形成し、裏面に1箇所貫通していない穿孔が見られる。105は尾鈴山酸性岩類製の磨石である。106は尾鈴山酸性岩類製の台石である。表裏面に部分的に被敲打痕が観察され、いずれの面にも明確な摩滅痕が認められる。107は尾鈴山酸性岩類製の台石である。表裏面に被敲打痕の可能性がある凹凸が観察されるが、剥落の可能性も指摘できる。108は尾鈴山酸性岩類製の打欠石錘である。抉部の縁辺にはややツブレが観察される。

S95・S44

ア 遺構(第5・34図)

S95は南区北東側の調査区壁付近に位置し、Ⅲ層(K-Ah)上面にて検出した。プランの南東側が町道の下に位置し検出できなかったため全体像は不明である。検出した部分では、北東～南西軸6.10m(張り出し部分を含む)、南東～北西軸4.20mで、検出面から床面まで0.41mであった。床面では、柱穴と見られるピット1基検出した。また、南東壁中央付近に焼土と炭化物を確認した。

S44はS95の南西側に位置し、Ⅲ層(K-Ah)上面にて検出した。長軸3.10m(張り出しを含む)、短軸2.60mで南西部分に張り出しを持ち、若干ゆがんだ方形を呈する。長軸はN55°Eを指す。検出面から床面までは0.44mであった。床面での柱穴は見られなかった。

S95とS44は切り合いの関係にあり、S44がS95を切っている。また、双方を検出する前に調査区東側トレンチを設定しⅧ層下部まで掘り下げていたため、両方の遺構とこのトレンチが重なる部分での平面プランは特定できなかった。さらにS44の南西側に張り出しが見られる。この部分も一部トレンチャー擾乱を受けており張り出しの角の部分が特定できなかった。

イ 遺物

S95の床面直上では完形の鉢(117)、台石(125)、剥片(123)が出土している。遺構に伴う遺物では、甕・壺・鉢・高環等の土器片、石製品がある。

S44の床面直上では完形の小型鉢が出土している。遺構埋土中の遺物としては、甕・壺・鉢の破片や鉄製品がある。

S95

甕(第34図109～116、第6表)

109～113は口縁部～胴部である。いずれも口唇部に横ナデが見られ、ゆるやかに「く」の字状に外反している。111・113の外面には全体的にススが付着している。114～116は底部である。116は上底である。

鉢(第35図117～121、第6表)

117は完形で出土している。119は小型鉢である。

高環(第35図122、第6表)

122は高環の裾部で穿孔を施す。

石器(第36図123～126、第7表)

123は尾鈴山酸性岩類を用いた不定形剥片である。124は尾鈴山酸性岩類製の磨石である。明確な摩滅は観察されないが、可能性を指摘したい。125は尾鈴山酸性岩類製の台石である。表面に被敲打痕が部分的に観察される。いずれの面も研磨されている可能性があるが、自然面との差は明瞭でない。126は磨製石器である。全面を研磨で石庖丁様に仕上げるが、刃部は作出しない。機能・用途は不明であるが、石庖丁未成品の可能性も考えうる。

S44

甕(第38図127、第6表)

127は甕の口縁部で、内外面全体に横ナデがある。

壺(第38図128、第6表)

128は壺の口縁部である。口唇部に横ナデがある。

鉢(第38図129・130、第6表)

129～130は小型鉢の口縁部～底部である。

130は完形で出土している。

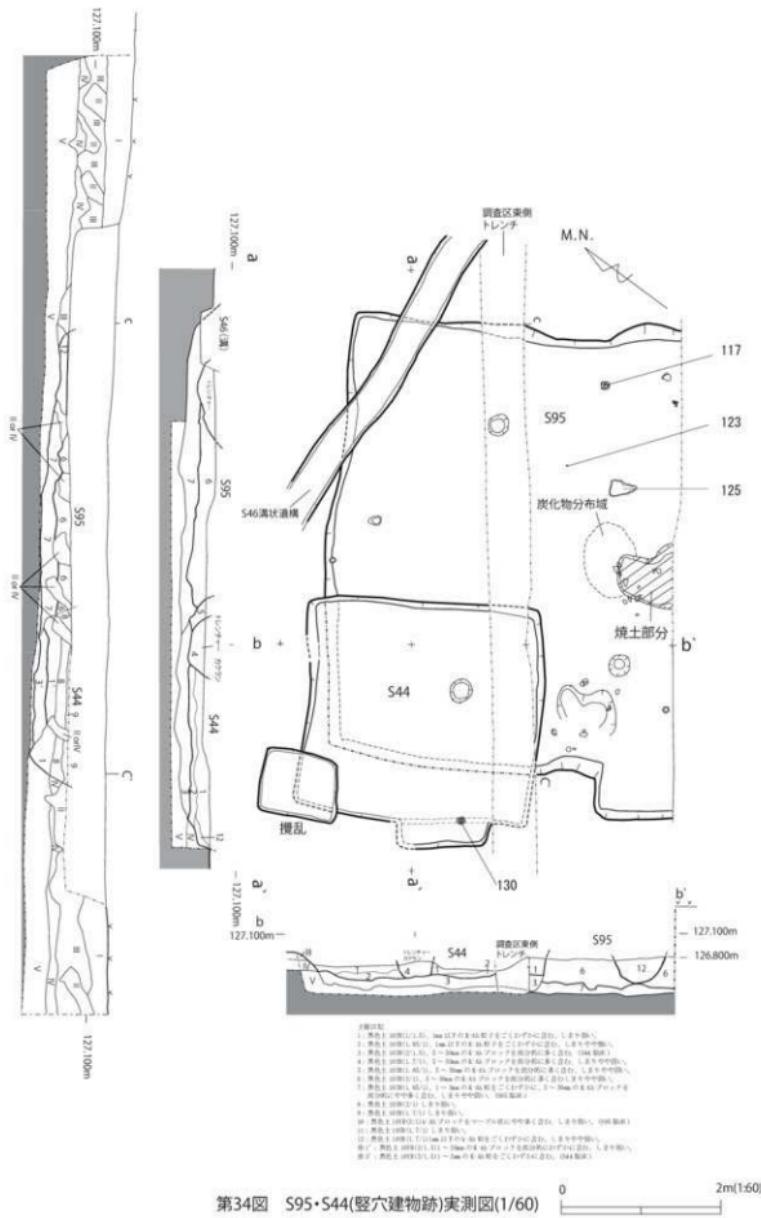
鉄製品(第39図131、第8表)

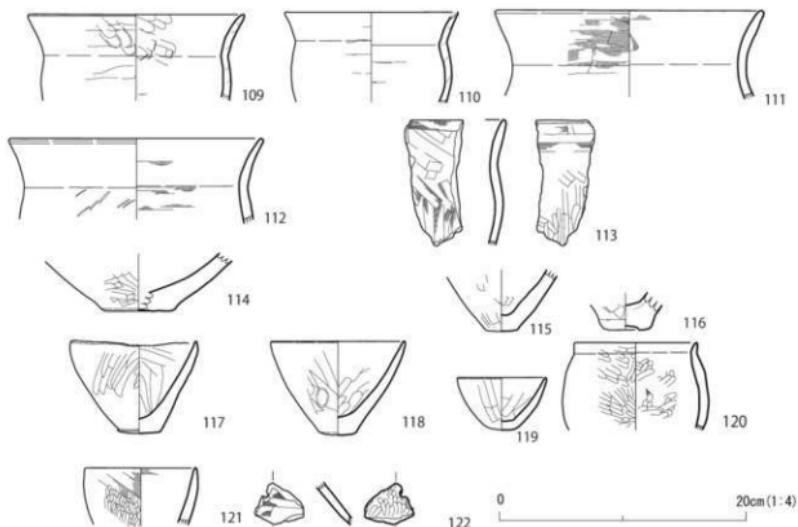
131は鉄片である。

その他の出土遺物

石器(第40図132、第7表)

132は安山岩製の打製石鎌である。やや大振りの平坦剥離で仕上げる。技術・形態的特徴から弥生時代の所産である可能性がある。

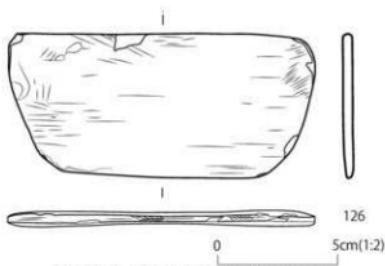




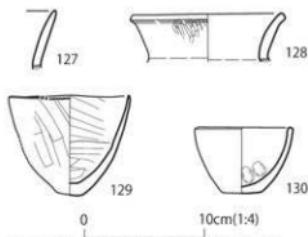
第35図 S95出土土器実測図(1/4)



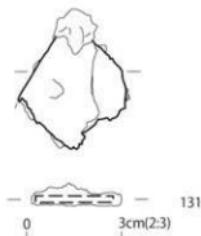
第36図 S95出土石器実測図①(1/2) 0 5cm(1:2)



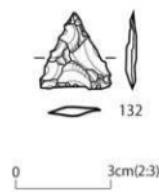
第37図 S95 出土石器実測図(2)(1/2)



第38図 S44 出土土器実測図(1/4)



第39図 S44 出土鉄製品実測図(2/3)



第40図 調査区内出土石器実測図(2/3)

第5節 中世～近世の遺構と遺物

1 中世～近世の概要

中世～近世の包含層は五次調査基本層序におけるⅡ層が相当する。しかしⅡ層内の遺構精査で土の色調の変化を捉えることが難しいため、Ⅲ層上面での精査にて遺構の確認を行った。(ここでは遺構を確認後、出土する遺物から遺構の性格や時期の特定を行った。)

Ⅱ・Ⅲ層の残存が見られた南区の遺構として、竪穴建物跡3軒、掘立柱建物跡3棟、土坑2基、溝状遺構1条、遺物を出土する土坑2基、遺物を出土するピット8基を検出した。

2 遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

南区では中央から南側にかけⅢ層の残存状況がよく、3軒の竪穴建物跡を確認した。

S2(竪穴建物跡)

ア 遺構(第5・41図)

S2は南区中央部S1に隣接する南西側で検出した。当初Ⅲ層上面の黒色部分を遺構と推定したが、トレンチを入れ精査したところ、第41図平面プランの北東部に、長軸2.00m短軸1.80mで長軸がN60°Eを指し、四隅にピットをもつ隅丸方形を呈する竪穴建物跡を検出した。

イ 遺物

S2からは土器片・陶磁器片・鉄製品が出土した。
土師器(第42図133、第9表)

133は土師環片である。内外面に回転ナデが施され、底部にヘラ切り痕を認める。

陶磁器(第42図134～136、第9表)

134は中国産青磁である。残存部は釉薬がやや厚く緑灰色を呈するが、細かな貫入が観察できる。135は器種不明の陶磁器である。136は常滑焼の甕である。口縁部がN字状を呈する。中野編年の6a型式(13世紀)に相当する。

鉄製品(第43図・第11表)

137は刀子もしくは鏃と思われるが銹による腐食が激しく器種特定ができなかった。S2の2層より出土した。

S3(竪穴建物跡)

ア 遺構(第5・44図)

S3は南区の南西部端に位置し、Ⅲ層上面で検出した。張り出しを2箇所もつ不定長方形である。長軸(張り出しを含む)2.83m、短軸2.24mで、長軸はN56°Eを指す。床面に柱穴と考えられるピットを4基認める。

イ 遺物

S3から土師器・須恵器・瓦質土器・石器が出土した。土師器・須恵器・石器は床面で、瓦質土器は遺構内ピットからの出土であった。

上師器(第44図138～140、第9表)

138・139は土師器小皿で、底部はヘラ切りである。139は表面がタール状に変色しており灯明皿として使われた可能性がある。140は上師器環で底面はヘラ切りである。外面に強い回転ナデ、内面にも回転ナデが確認できる。

須恵器(第44図141、第9表)

141は東播系須恵器の鉢である。口縁部に自然釉を認める。外部は回転ナデを呈する。

瓦質土器(第44図142、第9表)

142は瓦質土器の胴部と思われるが器種は不明である。外面に格子目のタタキが施されている。
石器(第45図143、第10表)

143は尾鈴山酸性岩類製の凹石である。表裏面に浅い凹面が観察される。

S4(竪穴建物跡)・S5～S6(土坑)

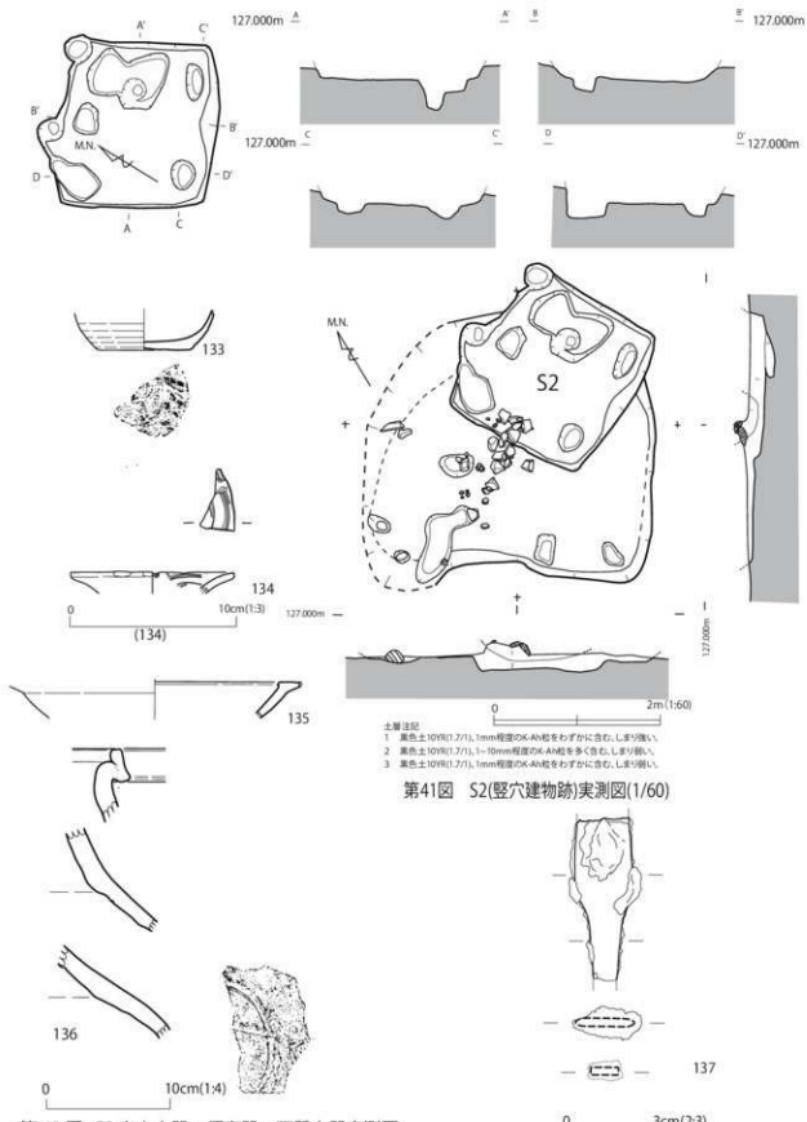
ア 遺構(第5・46図)

S4はS5～S6、S46や近代のS94と切り合いの関係で検出された。切り合い順は古いものからS4→S46→S5→S6→S94となる。

S4は長軸2.46m、短軸2.00mで隅丸方形を呈し長軸がN48°Eを指す。柱穴と思われるピットを1基確認した。S5は長軸1.44m、短軸1.22mで隅丸方形を呈し、長軸がN98°Eを指す。S6は長軸3.40m、短軸0.80mの隅丸方形を呈し、長軸がN46°Eを指す。

イ 遺物

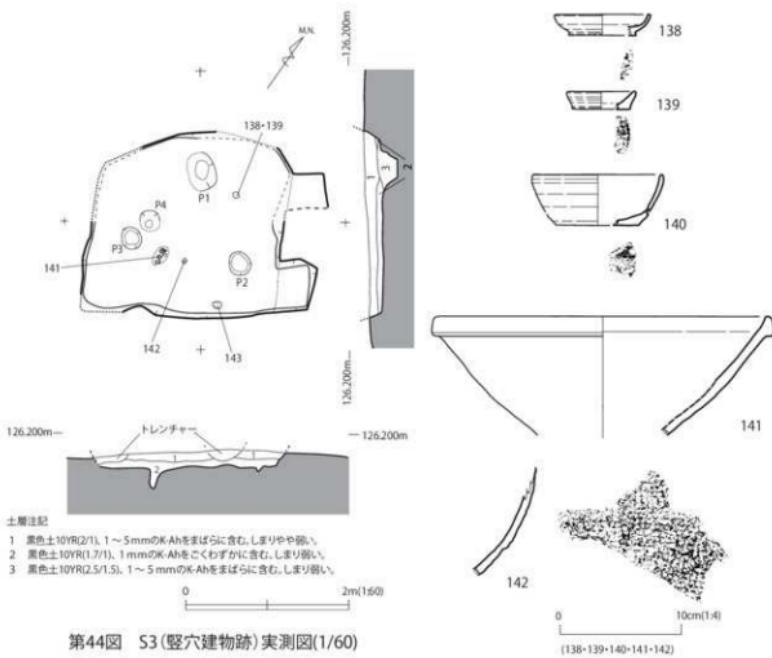
S4から中世の土師器片と弥生土器片が出土した。



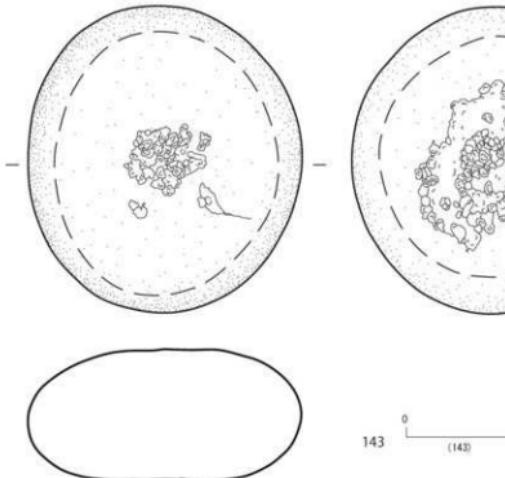
第42図 S2出土器・須恵器・瓦質土器実測図



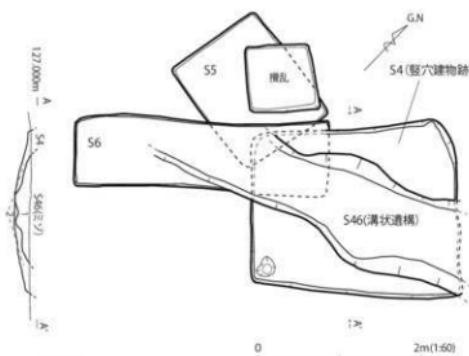
第41図 S2(豎穴建物跡)実測図(1/60)



第44図 S3(竪穴建物跡)実測図(1/60)



第45図 S3出土土器・須恵器・瓦質土器・石器実測図(縮尺はスケールに表示)



第46図 S4(竪穴建物跡)、S5・S6(土坑)、S46一部(溝状遺構) 実測図(1/60)

第8表 遺物観察表(土師器・須恵器・陶磁器・瓦質土器)

No.	種類	規格(mm)	目次	付属品				種類	手品・調理・支撑物			内側		他の特徴	備考	
				土器	石器	骨	貝殻		外周	内面	底面	内面	内面			
131	土器	100~110	808	52	2	2	2	108	内輪ナゲ、ヘア切口、縫合 の跡あり(施用火痕)。	内輪ナゲ	内底面 7.5~9.5 内底 5~10 7~10	内底 7.5~9.5 内底 5~10 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10
134	青磁	口横幅	808	52	10.0			108	縫合痕、斑点入	内輪ナゲ	内底面 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10
135	不明 (土器)	口横幅 130~140	808	52	120.0			108	内輪ナゲ	内輪ナゲ、内輪ナゲ	内底面 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10
136	陶器 (土器・灰陶器)	口横幅 底径 高さ (灰陶器)	808	52				108	ナゲ ナゲ、白質無 ナゲ	内輪ナゲ 内底面 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底面 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10 内底 5~10 内底 7~10	
138	土器	100~110	808	52	17.0	15.0	13.0	108	ナゲ ナゲ、施用火痕 ナゲ	内輪ナゲ	内底面 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10
139	土器	100~110	808	52	17.0	15.0	13.0	108	ナゲ ナゲ、ヘア切口 ナゲ	内輪ナゲ	内底面 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10
140	土器	100~110	808	52	110.0	80.0		108	内輪ナゲ、ヘア切口	内輪ナゲ	内底面 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10
141	灰陶器	100~110	808	52	127.0			108	内輪面、内底面 ナゲ	内底面 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	
142	瓦質土器 (土器)	無規	808	52				108	内輪ナゲ	内底面 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10 内底 5~10 内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	内底 7~10	

第9表 石器計測表

番号	種類	調査区	表記	幅	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
143	凹石	南区	S3R2		尾崎山滑石岩鉗	12.60	11.20	5.40	1175.90	S3底面直:

第10表 鉄製品計測表

番号	種類	調査区	最大長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
137	刀子?	南区	4.8	2.0	0.2	8.0	S2-2 稲より出土、基部に木質頭あり。

(2) 掘立柱建物跡

南区南側に3棟検出した。

柱穴からは土師器が多く出土しており、建物の帰属時期は中世と考えられる。なおトレントナーによる擾乱の影響を受け、柱穴の検出面が異なる場合もあった。

S262

ア 遺構(第5・47図)

南区で検出した建物跡で、南部に位置している。梁間1間(1.25m)、桁行1間(2.60m)の南北棟である。主軸はN38°Wで身舎面積は3.51m²を測る。柱穴掘方は長径平均27.5cm、短径平均20.8cmでほぼ円形を呈している。S248とS250の柱穴は擾乱下の面で検出している。

イ 遺物(第47・49図144、第12表)

144は柱穴S248から出土した土師器環である。体部内外面に回転ナデを認め、底部はヘラ切り痕を残す。

S263

ア 遺構(第5・47図)

南区で検出した建物跡で、南東部に位置している。

梁間1間(1.00m)、桁行2間(4.75m)の東西棟である。主軸はN60°Eである。南東部にS263に関連するとみられる柱穴S259を検出した。この柱穴は桁の延長には対応すると思われるが、梁に対応する柱穴は検出できなかった。S253～S258を柱穴として考えると、身舎面積は4.13m²を測る。梁間柱間は1.00m、桁行柱間は1.85～2.85mである。柱穴掘方は長径平均25.17cm、短径平均20.83cmでほぼ円形を呈している。S263からは遺物の出土は見られない。

S264

ア 遺構(第5・47図)

南区で検出した建物跡で、南西部に位置している。

梁間1間(1.65m)、桁行2間(2.50m)の東西棟である。主軸はN54°Eで、身舎面積は4.13m²を測る。梁間柱間は1.65m、桁行柱間は1~1.45mである。柱穴掘方は長径平均29.17cm、短径平均22.17cmで円形と梢円不定

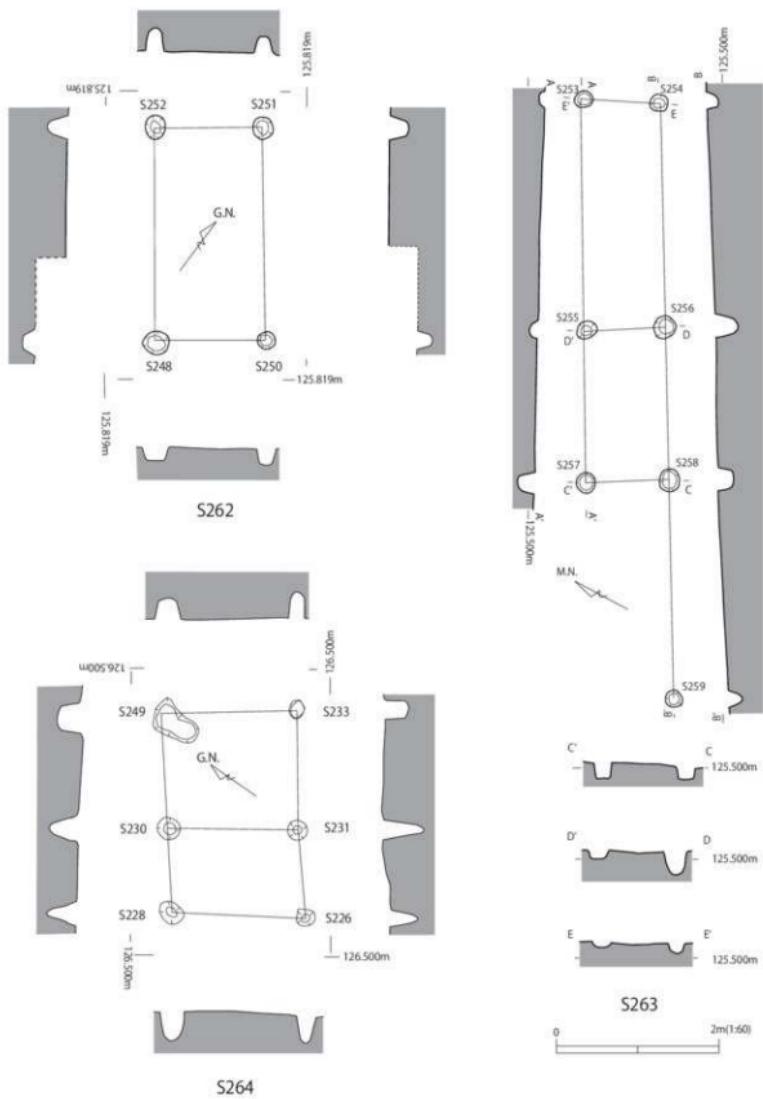
形を呈している。

イ 遺物(第47・48図145～153、第12表)

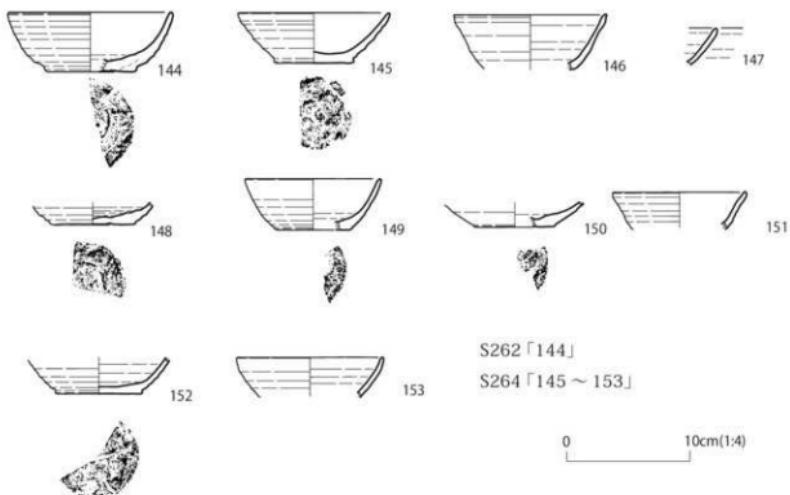
145～153はいずれもS264(掘立柱建物跡)の柱穴もしくは遺構内外の隣接ピットから出土した。同一柱穴から複数の遺物が出土する特徴がある。145・150・153はS226から出土した土師器である。これらは土師器環で内外面に回転ナデを呈し、底部はヘラ切りが施されている。150は土師器の口縁部が欠損していたが、底部の大きさにより土師器環と判断した。153は口縁部～体部の出土であり、口縁部が若干内反する特徴をもつ。146～148はS231から出土した。146は口縁部～体部、149は口縁部～底部、148は底部である。いずれの内外面も回転ナデが施されている。149はS230から出土した。体部中ほどから底部にかけての内外面に回転ナデが施されている。151はS234(隣接ピット)から出土した土師器環である。底部から体部内外面に回転ナデが施されている。

(3) 南区出土土器(第49図154～164、第12表)

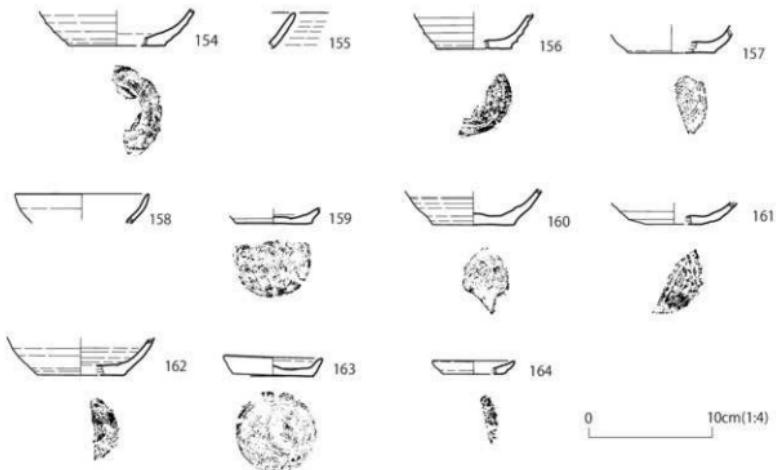
154～162は土師器環で、163～164は土師器皿である。これらの遺物には内外面に回転ナデが施されている。底部は、ヘラ切り痕がみられるものが多いが、157・163の底部には糸切り痕が確認できた。



第47図 掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第48図 S262・S264 出土土器実測図(1/4)



第49図 中世南区出土土器実測図(1/4)

第 11 表 土師器観察表

No.	種別	測量面積	出土位置	出土地点	深度	地質	剖面(地質)	子品・調査・実測値		内面	外面	測定の範囲	備考
								工具	鉢底	蓋底	蓋内		
144	II	1.00~0.50	405	5249	113.4	II.2.0	4.5	田代、田代タグ、ヘラ型	田代、田代タグ	浅鉢形	10~18 3~4	内径と底面を削り少し凸凹、手	手取川
145	II	1.00~0.50	406	5226	111.2	II.2.0	4.1	田代タグ、ヘラ型	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
146	II	1.00~0.50	407	5223	112.2	II.2.0	4.1	田代タグ、田代タグ、ヘラ型	田代タグ、田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
147	II	1.00~0.50	408	5231	—	—	—	田代タグ、田代タグ	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
148	II	1.00~0.50	409	5233	—	—	—	田代タグ、田代タグ、ヘラ型	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
149	II	1.00~0.50	410	5230	111.0	II.2.0	4.1	田代タグ、田代タグ、ヘラ型	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
150	II	1.00~0.50	411	5238	—	—	—	田代タグ、ヘラ型	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
151	II	1.00~0.50	412	5234	—	—	—	田代タグ、田代タグ	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
152	II	1.00~0.50	413	5232	—	—	—	田代タグ、ヘラ型	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
153	II	1.00~0.50	414	5230	111.0	—	—	田代タグ、田代タグ	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
154	II	1.00~0.50	415	—	—	—	—	田代タグ、ヘラ型	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
155	II	1.00~0.50	416	—	—	—	—	田代タグ	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
156	II	1.00~0.50	417	—	—	—	—	田代タグ、ヘラ型	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
157	II	1.00~0.50	418	—	—	—	—	田代タグ、和歌山型	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
158	II	1.00~0.50	419	—	—	—	—	田代タグ	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
159	II	1.00~0.50	420	—	—	—	—	田代タグ、ヘラ型高台	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
160	II	1.00~0.50	421	—	—	—	—	田代タグ、ヘラ型高台	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
161	II	1.00~0.50	422	—	—	—	—	田代タグ	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
162	II	1.00~0.50	423	—	—	—	—	田代タグ、ヘラ型	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
163	II	1.00~0.50	424	—	—	—	—	田代タグ	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	
164	II	1.00~0.50	425	—	—	—	—	田代タグ	田代タグ	浅鉢形	10~18 3~2	内径と底面を削り	

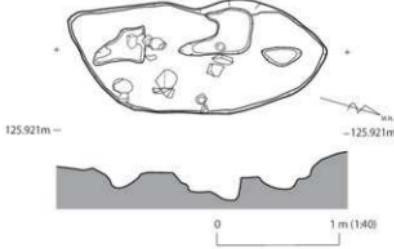
第6節 その他の遺構と遺物

本節では、時期不明の遺構や、表土一括やグリット一括、攪乱で出土した遺物について記述する。

1 遺構

S36(土坑)(第 5・50 図)

南区南東部のⅢ層上面で検出された。主軸方位は N18° W で、変形の楕円形を呈す。埋土は黒色土で、砂岩が 1 個と赤化している尾鈴山酸性岩類の礫 13 個が含まれていた。また、尾鈴山酸性岩類の礫は円礫が 1 個、残りが角礫で、すべてに赤化が見られた。他にもコンクリート片が含まれていた。底面は四凸が見られる。遺構から遺物は出土していない。



第50図 S36(土抗)実測図(1/40)

S46(溝状遺構)(第5・34・46・51図)

南区東中央のⅢ層上面で検出された。全体像は不明であるが、竪穴建物跡(S95)を切る。遺物はない。

S49(土坑)(第5・52図、第13表)

南区南部中央のⅢ層上面で検出された。トレンチャーの攪乱の影響を受けており、主軸方位は確定できない。埋土中から遺物165・166が出土した。165は壺の底部であり、平底を呈し内外面に工具ナデが見られる。166は統制陶器で、高台内に「岐」、「358」の刻印が確認できた。

2 遺物

表土一括や調査グリッド一括として取り上げた遺物(34点)を時代別に分類し、器種・大きさ別に掲載した。

(1) 古代(第53図166・第14表)

167は北区表土より出土した壺の口縁部である。

(2) 中世(第53図168～188・第14表)

168は南区Q5グリッドII層より出土した瓦質土器で壺の胴部と思われる。外面に格子目のタタキ痕、内面に板状工具による横・斜め方向のナデが施される。169は南区P3グリッドII層より出土した須恵器で壺の胴部と思われる。色調は内外面とも灰褐色で硬質であり、外面に格子目のタタキ痕、内面に板状工具による横・斜め方向のナデが施される。170は南区P2グリッドII層より出土した壺の口縁～体部で、備前である。179は土製品である。製品内部2カ所に直径1～2mm程度の孔を作り、使途は不明である。181は中国産青磁碗の底部である。182・183は中国産白磁皿である。184～187はQ5グリッドII層より出土した中国産青磁碗である。186には蓮状文が施されている。

188はP3グリッドII層より出土した陶磁器の摺鉢の口縁～体部である。14世紀の備前焼と推定される。

(3) 近世(第53図189～193・第14表)

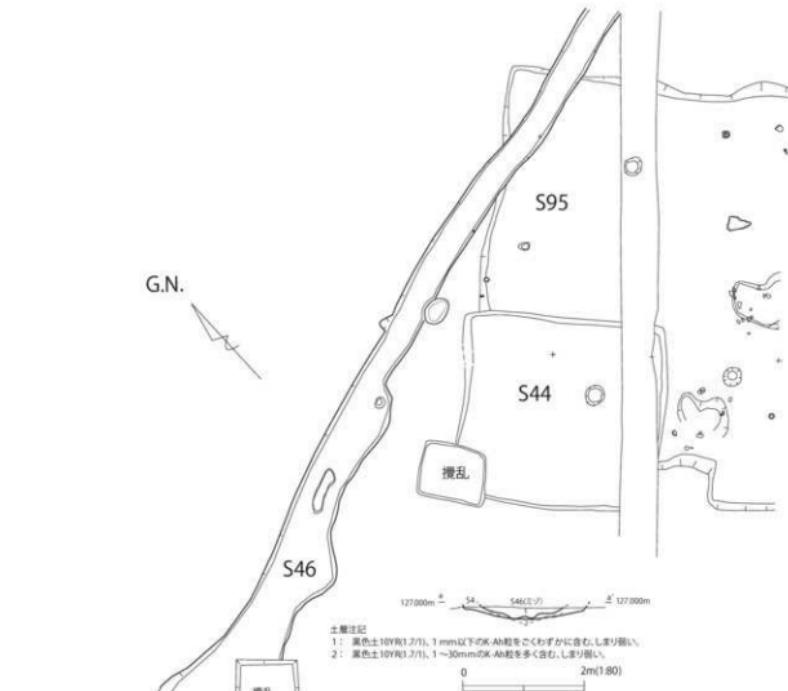
189～191はいわゆるくらわんか碗で、190は

口縁部内面や体部外面に二重格子状文が施される。191は内面見込に蛇ノ目釉剥ぎを施す。また、中央にコンニャク印判の五弁花文が、外面には折れ松葉文が施される。19世紀以降のものと推定される。192は土瓶の口縁部～体部である。備前系と推定される。193は北区の表土で出土した陶器水注の注口で、綠釉を呈しており交趾三彩?ではないかと推定される。

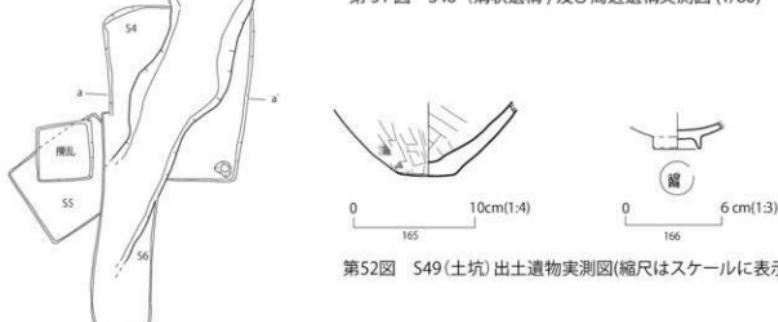
(4) 近世以降・時期不明

(第54図194～200・第15～17表)

194はS1に隣接する南区中央トレンチのII層攪乱から出土した鉄器である。形状やX線撮影の状態から刀の一端ではないかと推定される。195～197は北区表土から出土した。195は1銭貨幣で、大正二十年発行である。196はキセルの雁首、197はキセルの吸い口部分であると推定されるが、銅の成分を含む金属製品で、鋳造されたものと思われる。198は砥石または硯の破片と考えられ、黒褐色の頁岩を用いる。199は火打ち石である。灰緑色のチャートを用いる。剥片を素材とし、両側縁にツブレが観察される。200は火打ち石である。灰緑色のチャートを用いる。石核状で複数の稜線上にツブレが観察される。



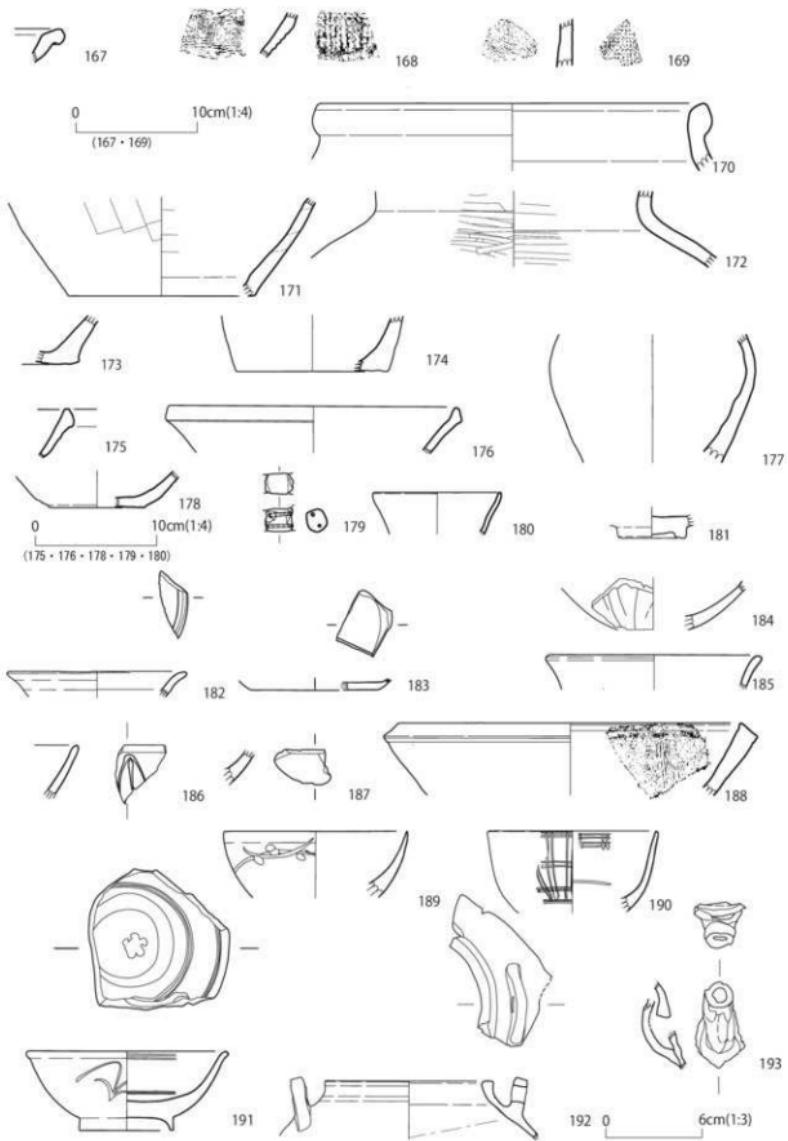
第51図 S46(溝状遺構)及び周辺遺構実測図(1/80)



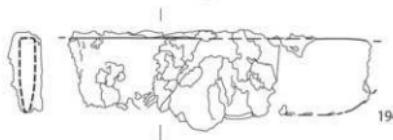
第52図 S49(土坑)出土遺物実測図(縮尺はスケールに表示)

第12表 遺物観察表(土器・陶磁器)

No.	編目	出土地點	測定面積	測定面積	測定面積				測定面積	測定面積				測定面積	総面積	
					COH	横幅	高さ	測定面積		外周	内面	外周	内面			
105	10	底面	0.05	0.40	4.2			10.00	能力面の上段ナギ、ナギ	上段ナギ、拘撋な丸	1.25(1.9)	T.3 T.8 S.4	埋	B YR Z-N	Area 11 (1.00m x 0.80m x 0.40m)	Area 3-5 (1.00m x 0.80m x 0.30m)
106	10	底面	0.05	0.40	15.00			10.00	拘撋	拘撋	0.01	N N	埋	N W	Area 12 (0.80m x 0.60m x 0.30m)	Area 3-6 (0.80m x 0.60m x 0.30m)



第53図 中世～近世 調査区内出土遺物実測図（縮尺はスケールに表示）



194

0 3cm(2:3)
(194・196・197)

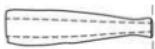


195

0 2cm(1:1)
(195)



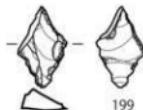
◎ 196



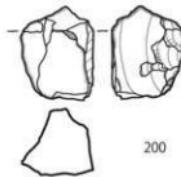
◎ 197



198



199



200

0 5cm(1:2)
(198・199・200)

第54図 近世以降調査区内出土遺物実測図（縮尺はスケールに表示）

第V章 五次調査のまとめ

銀座第1遺跡（五次調査）では旧石器時代から現代までの各時代の環境を伺う遺構や遺物が確認された。旧石器時代～縄文時代早期には旧地形としての自然流路跡や縄文時代早期以前の遺構としての陥し穴状遺構の存在が、また竪穴建物跡・土坑・掘立柱建物状遺構の検出など各時代を代表する遺構や遺物が検出されている。本章では今回の調査結果を時代ごとに整理し、まとめとしたい。

1 旧石器時代

旧石器時代の旧地形として自然流路跡5条が確認された。また遺物として、細石刃1点、ナイフ形石器4点、石核2点、角錐状石器1点、剥片6点が出土している。遺物は破片ではなく完成品であったため、この地域が定住の場ではなかった可能性がある。

2 縄文時代早期

縄文時代早期の旧地形として自然流路跡1条、遺構として陥し穴状遺構4基が確認された。遺物は、打製石器3点、石核2点、剥片9点が出土している。陥し穴状遺構は自然流路跡に沿うように掘られており、狩り場の要素をもつものと考えられる。

3 弥生～古墳時代

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構として竪穴建物跡4軒が確認された。また遺構からは土器等が多数出土しており、定住の痕跡が伺えた。

時期の特定には松永編年表2004を用いた。竪穴建物跡S1は、甕No41～47の口縁部の長さが短いことや複合口縁壺No64が存在すること、高環No95～96の環部の形状から3期（弥生終末期）に、竪穴建物跡S95は、甕No109～112の口縁部の長さや深鉢No117～118の底部から口縁部の長さから4期（弥生終末期）に該当すると考えられる。この結果、2軒の竪穴建物跡には時期差があることが分かった。

またこの時代の遺物として特筆すべきは、装飾高環片が出土したことである。第55図201は、宮崎県埋蔵文化財センターに永らく保管さ

れていた、装飾高環である。出土状況や来歴など詳細は不明だが、昭和55ないし56年に川南町大字平田字南原に所在する南原A遺跡（遺跡番号2018）（註1）の出土土器とみなされる。地元の町文化財保護審議会委員の手を介して宮崎県教育庁文化課（当時）に寄託されたままであった。宮崎県下では数少ない装飾高環の一つであるため、今回の発掘調査で装飾高環の一部が出土したのを機に、図化と公表を行う。類例としては、銀座第1遺跡、川南町東平下遺跡1号円形周溝墓（註2）、川南町赤坂遺跡（第55図139・146・147）などがある。

銀座第1遺跡の周辺には川南古墳群の墳墓（前方後円墳）が存在しており、首長墓との関係も伺える。また、竪穴建物跡はいずれも旧石器時代～縄文時代早期に存在した自然流路の上に位置していた。水流による攪拌や堆積を繰り返した結果、斜面が緩斜面へ、狩り場的な場所が定住の場所へ変遷したことが考えられる。

4 中世～近世

中世の遺構として竪穴建物跡や掘立柱建物跡、遺構を伴うピット等が確認された。中世の遺構はトレンチャーによる擾乱の影響を強く受けており、深い位置での検出となった。遺物は竪穴建物跡や掘立柱建物跡の柱穴ピットやその周辺から、中世～近世と見られる土器や土師器（壺・皿）、須恵器、陶磁器（青磁・白磁）、瓦質土器等が出土した。これらは15世紀代が帰属時期として想定されるものであった。また、底部にヘラ切りが施された土師器壺が多く出土する中で、底部に糸切りが施されたものが2点出土した。出土した土師器（壺・皿）の体部は似通っているため、底部の観察なしでは見分けがつかない状況であった。

5 近代～現代

南区で出土した陶磁器は統制陶器であり、底部の高台内に「岐」と「358」のクロム印が認められ、戦時中岐阜県にて製造された美濃焼の小皿であると推測できた。これらのことから、戦前から戦後にかけてこの地域が起居の場となっていたことが伺える。帰属時期

が特定できないものとして煙管・火打ち石が出土した。煙管の材質は銅を含む金属製鋳物と思われる。南区表土から出土した。火打ち石は、チャートを石材とするものであり、生活の中で火を用いたことが推測できる。

【参考文献】

川南町 1983 「川南町史」

川南町教育委員会 1982 「川南町の埋蔵文化財 遺跡詳細分布調査報告書」

宮崎県埋蔵文化財センター 2006 「銀座第1遺跡(一・二・三・四次調査)」『宮崎県埋蔵文化財

センター発掘調査報告書』第120集

宮崎県埋蔵文化財センター 2006 「藏座村遺跡」

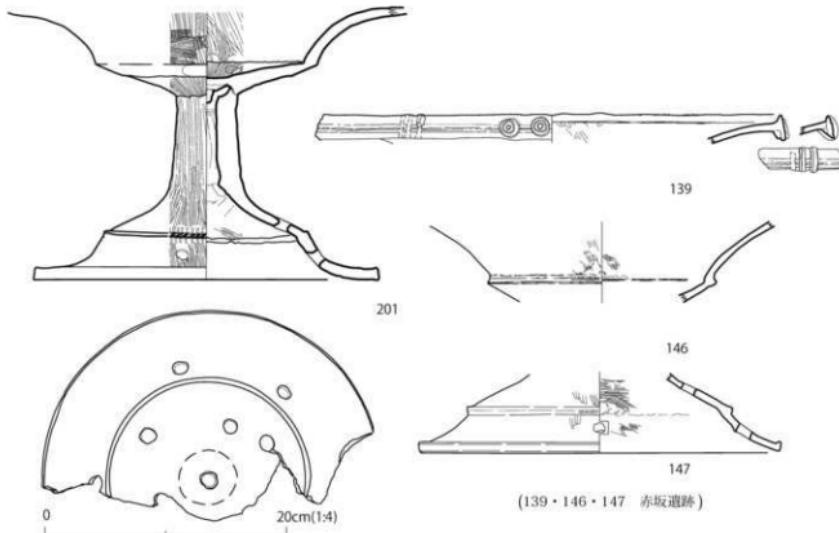
『宮崎県埋蔵文化財センター 発掘調査報告書』

第53集

松永幸寿 2004 「日向における古式土師器の成立と展開—宮崎平野部を中心として—」『南西四国—九州間の交流に関する考古学的研究』愛媛大学

註1 川南町教育委員会 1983 「川南町の埋蔵文化財 遺跡詳細分布調査報告書」

註2 宮崎県教育委員会 1986 「東平下1号円形周溝墓」『宮崎県文化財調査報告書』第29集



第55図 装飾高坏(宮崎県内出土)実測図(1/4)

第17表 装飾高坏(宮崎県内出土)観察表

No.	種別	装飾部位	計測法	直径 mm				形状	寸法・測量・比較		剖面				装飾特徴	備考		
				外径	内径	底面	壁厚		外径	内径	外底	内底	外底	内底				
201	高坏	(1回転切削) 縦割 (1回転) 横割 (1回転)	—	未記録 +1	28.4 (22.0)	28.4 (22.0)	2.0	高方約0.7mm、低方約1.0mm 高方約0.7mm、低方約1.0mm	■ナギサ、ナギサ	■ナギサ、ナギサ	8.01 10.10 8.02 11.01 10.10 8.01	10.10 8.02 11.01 10.10 8.01	8.01 10.10 8.02 11.01 10.10 8.01	8.01 10.10 8.02 11.01 10.10 8.01	8.01 10.10 8.02 11.01 10.10 8.01	8.01 10.10 8.02 11.01 10.10 8.01	8.01 10.10 8.02 11.01 10.10 8.01	8.01 10.10 8.02 11.01 10.10 8.01

VI章 総括

銀座第1遺跡は五次調査をもって全調査を終了した。本章ではこれまでの調査報告を総括し、各時代毎に本遺跡がもつ性格や特徴について考察する。

1 旧石器時代

本遺跡では、旧石器時代の遺構は確認されなかったが、五次調査で地面の傾斜とそれに伴う旧地形の自然流路跡を確認した。遺物は、一～五次調査でナイフ形石器・剥片・細石刃・細石刃核など数点が認められたが、石器の接合資料や大きな礫群は見られなかった。礫はあるものの赤化は弱く炭化物は確認されていない。周辺遺跡の状況も同様で、隣接の藏座村遺跡では傾斜を伴う地形でナイフ形石器や剥片・細石刃・細石刃核が確認されている。このような状況から、本遺跡周辺は旧石器時代において起居する場ではなく、当時の人々の行動半径内と考えられ、起居の場は別に存在することが想起される。

2 繩文時代早期

五次調査で、縄文時代早期の旧地形として自然流路跡を確認した。一～五次調査では遺構として、陥し穴状遺構・集石遺構が確認されている。遺物は土器片2点・石器の製品・剥片が認められる。集石遺構の礫には赤化が認められ、火を使用した痕跡が見られる。しかし、出土した土器片は僅かであり、集石遺構は本遺跡の南西部縁辺の最も低い位置での検出であった。遺跡は南西方向に緩やかに傾斜しており、傾斜の途中で検出した自然流路跡や陥し穴状遺構の存在からも起居する場とは考えにくい。むしろ狩り場の要素をもつ場と考えることが妥当と思われる。

3 弥生時代～古墳時代

一～四次調査では、溝状遺構や土坑中から弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が出土した。五次調査では竪穴建物跡が検出され、遺構から壺・壺・鉢などの土器類が出土した。これは一～四次調査で溝状遺構から出土した土器類と類似し帰属時期も一致している。また、五次調査

で装飾高环片が出土した。装飾高环はこれまでに本遺跡周辺の周溝墓や竪穴建物跡からの出土例が報告されているが、類例も少なく今後の資料の蓄積を待ちたい。

4 中世～近世

今回の五次調査終了に伴い、一～五次調査で検出された遺構分布図を中世と近世に分け作成した(第56、57図)。

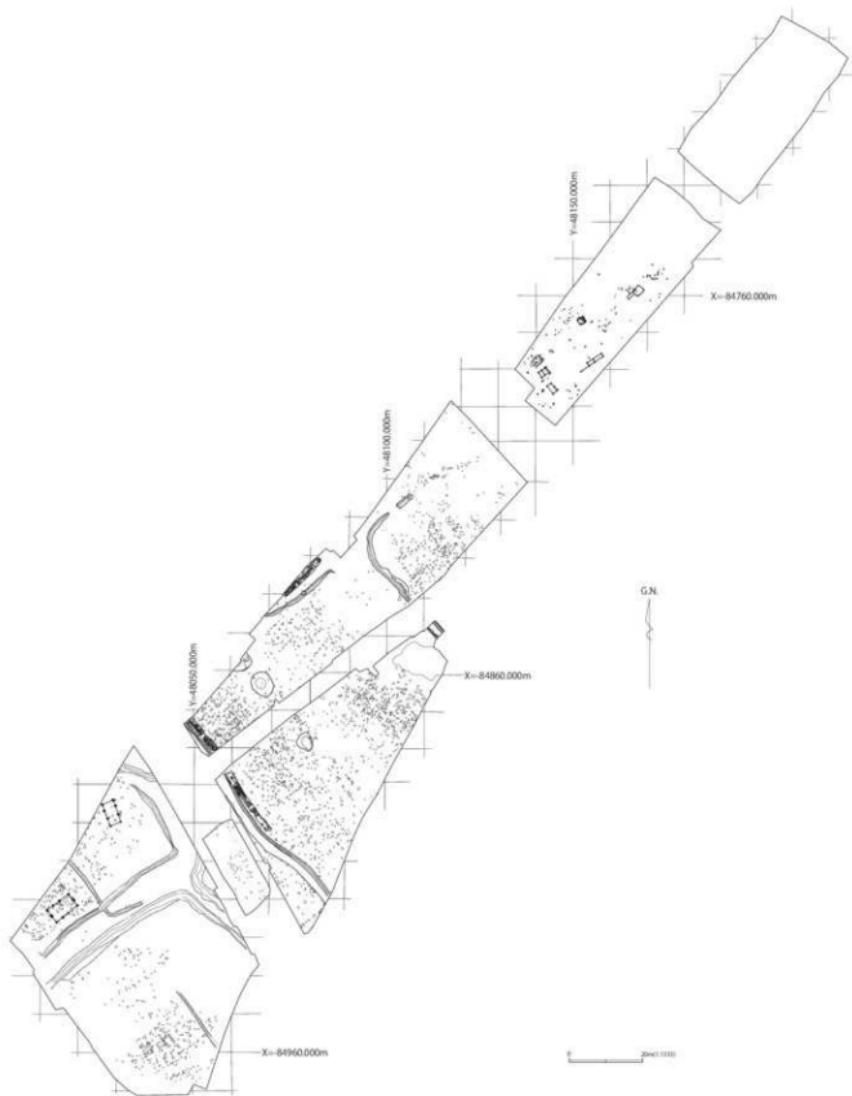
中世は、縦横に走る溝によって方形に区画された土地に集村が成立するという特徴が見られる。五次調査では竪穴建物跡・掘立柱建物跡が確認され、遺物として中世土師器も一定量出土した。掘立柱建物跡の主軸が一定でないことや、建物の大きさの違いから、集村部と周辺部の建物の時期が異なっていることも分かった。

近世では、道路状遺構などにより中世から続く遺構も見られるが、土坑墓の集中が確認され、溝に区切られた居住区と埋葬場所が明瞭に分離されている状況が見られた。また調査区内には多くのピットが検出されるもの、削平を受け全体像が不明瞭であったり、遺物を伴うが時期が特定できない掘立柱建物跡も確認された。

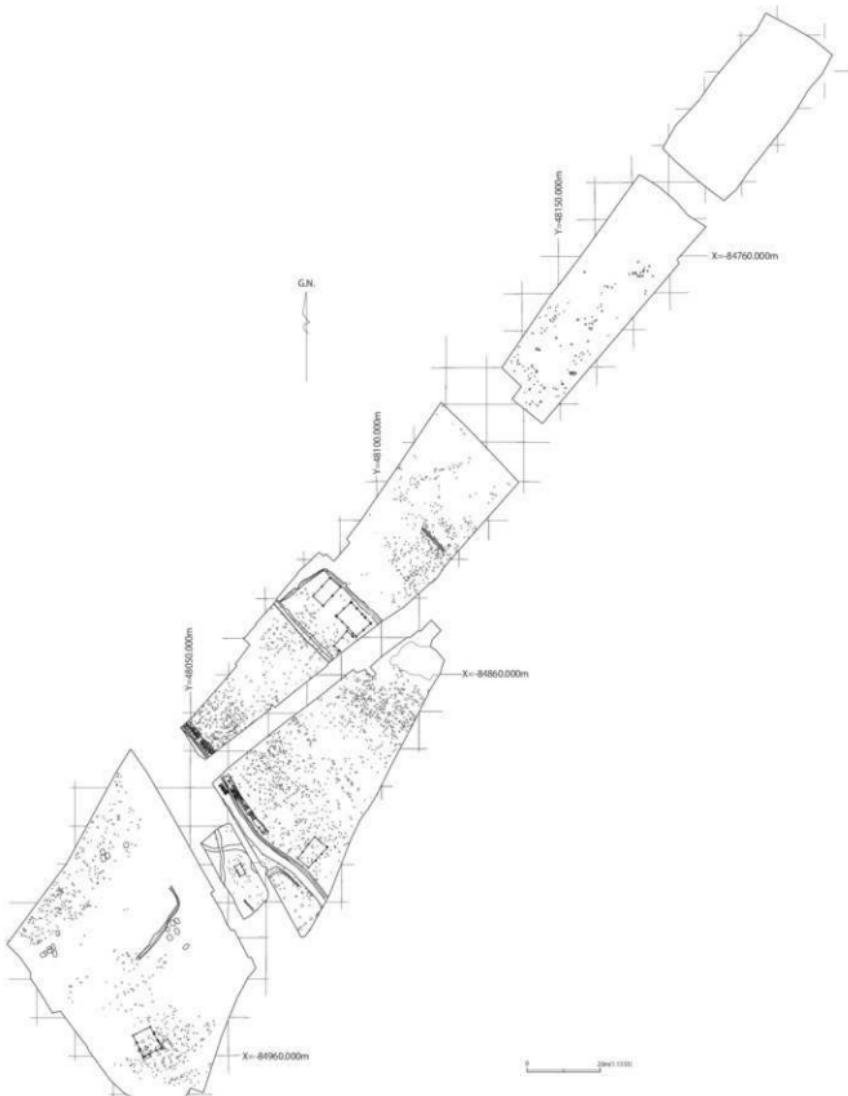
これらのことから、中世にはある程度の規模をもつ集村や丘陵の傾斜部分にその周辺部が存在し近世にも続いていると思われる。しかし後の開墾や耕作等の影響から削平を受け、状況が不明瞭になったことが伺える。またこの時代は、他地域との交流によってもたらされたと思われる遺物も多く、活発な交流の跡も伺えた。

【引用・参考文献】

- 川南町 1983 「川南町史」
川南町教育委員会 1982 「川南町の埋蔵文化財 遺跡詳細分布調査報告書」
宮崎県埋蔵文化財センター 2006 「銀座第1遺跡(一・二・三・四次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 第120集
宮崎県埋蔵文化財センター 2006 「藏座村遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター 発掘調査報告書』 第53集
小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会



第 56 図 銀座第 1 遺跡（一～五次）遺構分布図（中世）



第57図 銀座第1遺跡（一～五次）遺構分布図（近世）



S1(壓穴建物跡) 遺物検出状況



S1(壓穴建物跡) 完掘状況



S95・S44(壓穴建物跡) 完掘状況



S2(壓穴建物跡) 完掘状況



S3(壓穴建物跡) 完掘状況



S4(壓穴建物跡) 、 S5・S6(土坑) 、
S46(潟状遺構) 完掘状況



S102(陥し穴状遺構) 埋土堆積状況



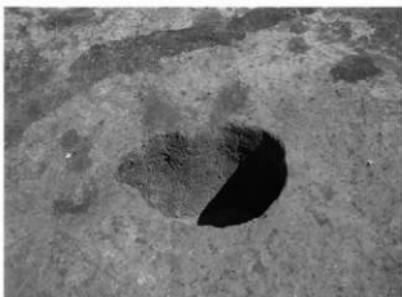
S103(陥し穴状遺構) 完掘状況



S112(陥し穴状遺構) 検出状況



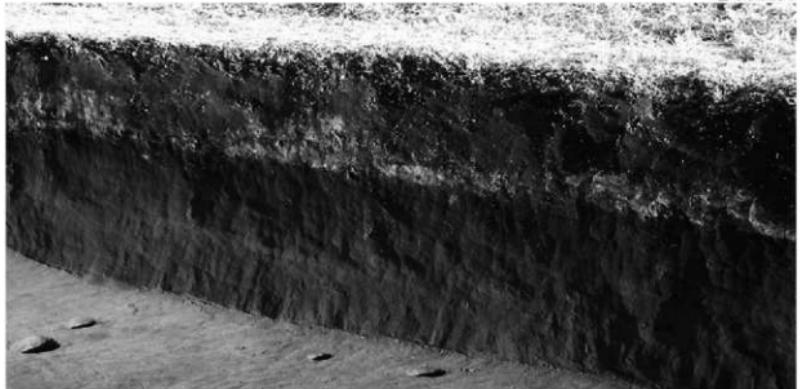
S260(集石遺構) 検出状況



S110(土坑) 完掘状況



S111(土坑) 完掘状況



南区 土層断面 (k -Ah 堆積状況) 中央部西より



北区 土層断面 (A T 上擾乱状況) 南部北東より



南区 土層断面 (A T 堆積状況) 北東部南西より

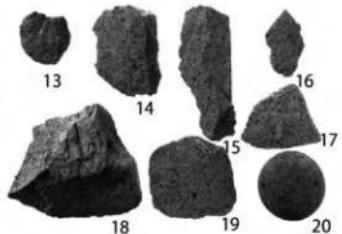


南区 (A T 面傾斜堆積状況) 中央部北西より

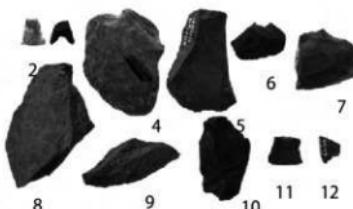


0 2cm

S104 出土遺物(剥片)¹



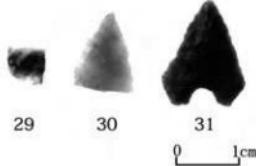
南区 旧石器～縄文時代早期出土遺物②



南区 旧石器～縄文時代早期出土遺物①

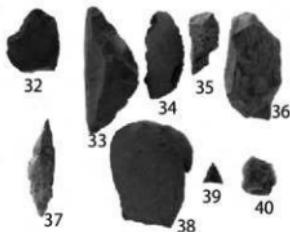


北区 旧石器～縄文時代早期出土遺物



0 1cm

事前調査 旧石器～縄文時代早期出土遺物①



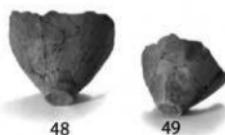
事前調査 旧石器～縄文時代早期出土遺物②



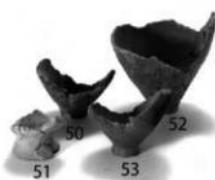
S1 (竪穴建物跡) 出土遺物①



S1 (竪穴建物跡) 出土遺物②



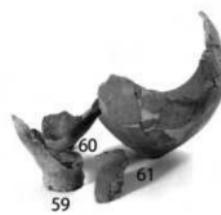
S1 (竖穴建物跡) 出土遺物③



S1 (竖穴建物跡) 出土遺物④



S1 (竖穴建物跡) 出土遺物④



S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑤



S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑥



S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑦



S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑧



S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑨



66

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑩



67

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑪



68

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑫



69

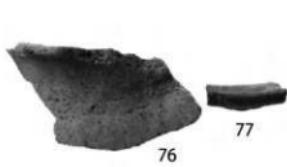
S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑬



S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑭



S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑮



76

78

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑯



S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑰



79

S1 (竪穴建物跡) 出土遺物⑩



80

S1 (竪穴建物跡) 出土遺物⑪



81

S1 (竪穴建物跡) 出土遺物⑫



82

S1 (竪穴建物跡) 出土遺物⑬



83

S1 (竪穴建物跡) 出土遺物⑭



87

85

84

86

S1 (竪穴建物跡) 出土遺物⑮



88

S1 (竪穴建物跡) 出土遺物⑯



91

90

89

S1 (竪穴建物跡) 出土遺物⑰



92



93

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑥



102

101

94

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑦



95

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑧



97

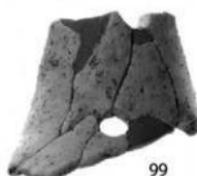
96

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑨



98

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑩



99



100

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑪

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑫



S1 (竖穴建物跡) 出土遺物④



104



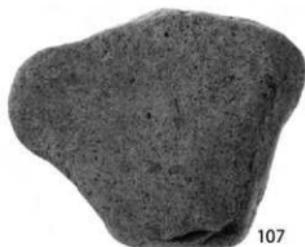
105

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑤



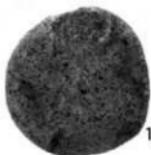
106

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑥



107

S1 (竖穴建物跡) 出土遺物⑦



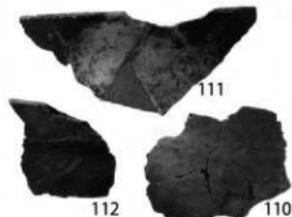
108

S51 (竖穴建物跡) 出土遺物



109

S95 (竖穴建物跡) 出土遺物①



111

112

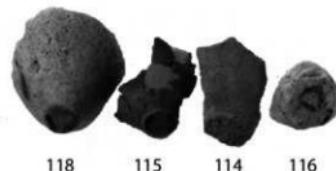
110

S95 (竖穴建物跡) 出土遺物②

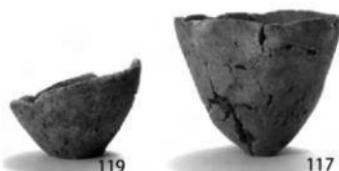


113

S95 (竖穴建物跡) 出土遺物③



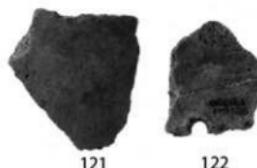
S95 (竖穴建物跡) 出土遺物④



S95 (竖穴建物跡) 出土遺物⑤



S95 (竖穴建物跡) 出土遺物⑥



S95 (竖穴建物跡) 出土遺物⑦



S95 (竖穴建物跡) 出土遺物⑧



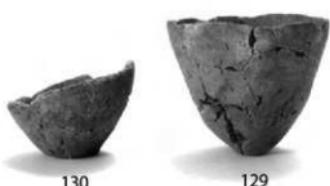
S95 (竖穴建物跡) 出土遺物⑨



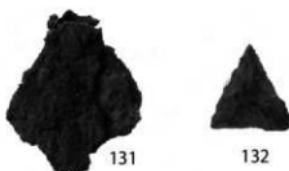
S95 (竖穴建物跡) 出土遺物⑩



S44 (竖穴建物跡) 出土遺物①



S44 (竖穴建物跡) 出土遺物②



S44 (竖穴建物跡) ③ 南区Ⅱ層出土遺物



S2 (竖穴建物跡) 出土遺物①



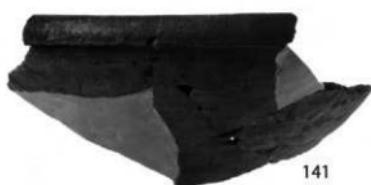
S2 (竖穴建物跡) 出土遺物②



S2 (竖穴建物跡) 出土遺物③



S3 (竖穴建物跡) 出土遺物①



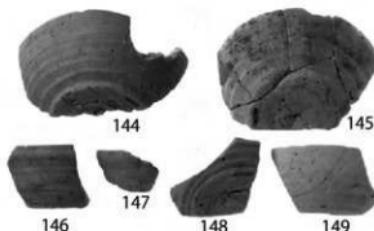
S3 (竖穴建物跡) 出土遺物②



S3 (竖穴建物跡) 出土遺物③



S3 (竖穴建物跡)出土遺物④



S262・264 (掘立柱建物跡)出土遺物①



S262・264 (掘立柱建物跡)出土遺物②



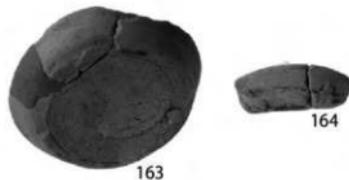
中世：南区出土遺物①



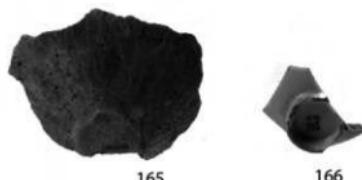
中世：南区出土遺物②



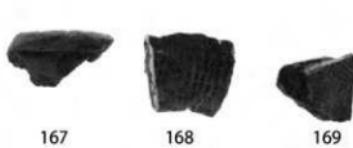
中世：南区出土遺物③



中世：南区出土遺物④



S49(土坑)出土遺物



南・北区 表土・II層一括 出土遺物①



南・北区 表土・II層一括 出土遺物②



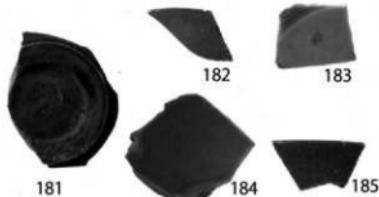
南・北区 表土・II層一括 出土遺物③



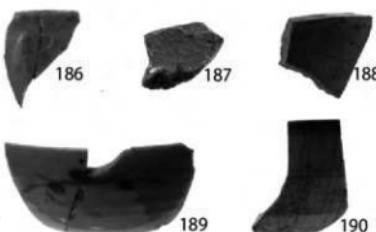
南・北区 表土・II層一括 出土遺物④



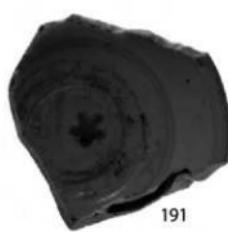
S229(ピット)・南区II層P3グリッド一括 出土遺物



南区表土・グリッドII層一括 出土遺物

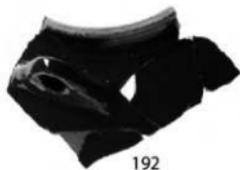


北区表土・南区グリッドII層一括 出土遺物



南区グリッドII層一括 出土遺物

卷末図版 14



192



193



194



195



196



197

南区グリッドII層・北区表土一括 出土遺物

南区擾乱・北区表土一括 出土遺物



198



199



200



201

事前北区・北区・南区表土一括 出土遺物

宮崎県児湯郡川南町出土 装飾高环

報 告 書 抄 錄

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 194 集

銀座第 1 遺跡（五次調査）

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 64

2011 年 1 月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒 880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印 刷 有限会社 いろは企画

〒 889-1603 宮崎市清武町正手 3 丁目 19-2

TEL 0985(85)5889 FAX 0985(85)5889
